

幼児の教育

第六十二卷

第六号

幼児を交通事故から守りましょう



日本幼稚園協会

玉川大学助教授
栄光幼稚園長

日名子 太郎 著

保育

— その理論と実践 —

A5判上製美装箱入

価四八〇円
一〇〇〇円

教育心理学者であり、現場において実際に保育を実践してきた著者にして、初めてなしうる偉業の成果である。本書は、従来心理学や教育学の理論が現場における実践と遊離していた点について、実践から理論——理論から実践への結合をはかった。きわめて平易に解説されている叙述は、現在現場に従事している実践家にも、これから現場につく学生にも、意義ある伴侶となるであろう。

お茶の水女子大学教授 平井信義氏のことば——園長の現職にあった日名子さんは再び学生となつて立教大学の心理学を卒業された。そして、保育の実践と研究とを結びつける努力を重ねた。日名子さんと会う度に研究室の研究が子どもの活動と喰いちがうことを指摘される。私自身、日名子さんから教えられることが非常に多くあったのを思い出す。そうした批判がこの著書には随所に現われている：

中央幼児教育研究会編

辰見敏夫・角尾稔・日名子太郎 著

保育研究法

改訂版

A5上製
価四六〇円
一〇〇〇円

教師養成研究会・幼児教育部会編

幼児教育叢書全十巻

- | | | | |
|--------------|------|------------|------|
| 1 幼児の教育課程 | 価三〇〇 | 2 幼児の心理 | 価三〇〇 |
| 3 幼児の健康指導と体育 | 価三〇〇 | 4 幼児の社会性指導 | 価三〇〇 |
| 5 幼児の自然観察 | 価三〇〇 | 6 幼児の言語指導 | 価三〇〇 |
| 7 幼児の音楽リズム | 価三〇〇 | 8 幼児の絵画製作 | 価三〇〇 |
| 9 幼稚園の経営管理 | 価三〇〇 | 10 幼児の両親教育 | 価三〇〇 |

学芸図書 株式会社 東京都千代田区神田錦町1丁目 振替東京 96491

幼児のための 紙芝居です



●'63年度幼児テキスト紙芝居全集第3回配本中

これ、ぼくのだよ

¥ 350 じぶんのものと
ひとのもの

みんなで まちぼうけ

¥ 350 時の記念日
やくそくをまろう

動く保育室・ディスプレイカード

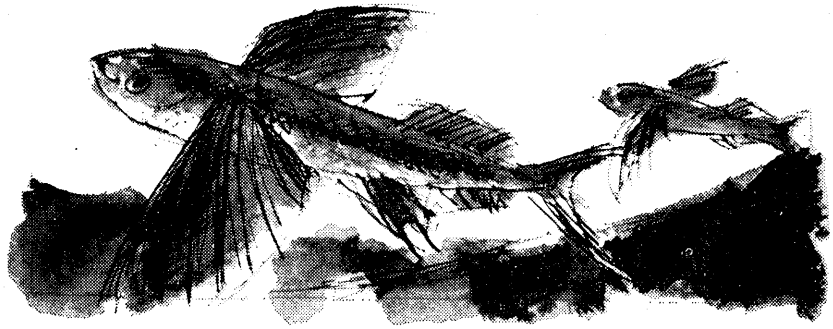
よいこの一日

監修・お茶の水女子大学教授
医学博士 平井信義

¥1000 A全版 上質紙12枚

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17 振替東京 株式会社
TEL (341) 3400・3227・1458 29855

教育更劇



幼児の教育 目次

第六十二卷 六月号

表紙 初山 滋

領域「社会」と個我の目覚め……………	坂元彦太郎……………(2)
幼稚園の社会……………	高橋省己……………(4)
社会性について……………	辰見敏夫……………(8)
* 「社会」で強調したいこと	
友だちといっしょに遊ぶ……………	浅野寿美子……………(12)
幼児の遊びと「社会」……………	神沢良輔……………(14)
生活訓練と社会生活の認識……………	高橋さやか……………(17)
園での遊び——その教育的ねらい……………	友松あきみち……………(19)
問題児の側から……………	平井信義……………(21)
ひとりで立つ……………	広岡キミエ……………(24)
「社会」でねらうものとその指導……………	舟木哲郎……………(27)
温かくしかもキリッとした保育者の姿勢……………	堀内康人……………(29)
米国におけるソーシャルスタディズ……………	黒田成子……………(32)
「社会」を中心とした指導の実際……………	お茶の水女子大学付属幼稚園……………(38)



領域「社会」と個我の目覚め

坂 元 彦 太 郎

すべて、名が必ずしも体を現わすものでない、という原則は、領域「社会」のような、その概念を故意に新らしく造りあげた場合には、特にあてはまる。「社会」という語には、しぜんにはば共通な意味ができあがっているので、この本来の意味と、領域「社会」の意味するところのものが混同されがちになるのであるが、両者の区別はどこまでもはつきりさせておく方がいいと、私は思う。ところが、いっそう事態を混乱させるのは、社会という語の本来の意味自体が、人により場合により相当な幅をもって揺らいでおり、また、この領域にまとめられたものに「社会」の名をつけたのは、その本来の意味に通ずるものを相当に強く含んでいるからである。こうしたややこしい関係からくる混乱を避けるために、別の名をつけるか、まとめ方をかえることが考えられるが、さりとて妙案

は浮かばないであろう。だから、いちばんたやすい理解の仕方は、「社会」という名前は、いろいろな面を包みこむ、一つの符号に過ぎないのだと思って、実際にそれに含ませている中味の具体的な姿に添っていろいろ考えていけばいいのだ、ということになるのではなからうか。

「社会」に含まれているさまざまな具体的なねらいを、大きく分類すれば、三つの分野に分けることができるのではなからうか。第一は、（必ずしも適切なことばではないが）個人的な生活についての、のぞましい態度や習慣をめざすところのものである。清潔や食事などのいわゆる基礎的生活習慣から、自分のことは自分でする、仕事をしんぼうしてしとげるといった態度のようなものが、これに属するのはいうまでもない。しかし、領域の名前が社会とつけてあ

るがために、これらのことが幼児教育の中心のねらいのひとつであり、ここに入れる外にはないということを知っているながら、肩身せまい借家人のように、遠慮しながらそつとつこんでおく、といったやり方をする人がある。たしかに、いわゆる社会性とはちがったものであるが、はつきりとこれらの面が人間生活にもつ重要さを認めて、堂々と領域「社会」の中に位置づけていいと私は主張したいのである。

いうなれば、これらは、より年長の場合には自我の確立とか、良心の目ざめとか、理性的な自覚とかいわれるようになるところの、人間性のいちばん奥ふかくあつてその中心になるものへ、通ずるめばえをつちかうことである。幼児にふさわしい形や質においてであるが、端的に、そしてとりおとしなくこれらのねらいをはつきりとりあげることがのぞましい。

これはまた、全く平凡に、われわれが幼児にこうあつてほしいとのぞんでいることそのものである。のびのびと明るく、すなおで純真である、といった、よく園の教育目標としてかかげてあるようなものも、ここにはつきり所属させていいのではなからうか。

こうした内面的な個人的な自覚への道は、結局は、社会生活の中ではぐくまれるものだから「社会」にいていいのだ、と説明する人もある。また、こうした個人によって社会が成立するのだから「社会」の範囲にはいるという人もあろう。

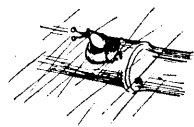
しかし、こうした内面的な自覚や個人としての態度が育っていくのは、家庭なり、園なりののぞましい社会環境の中での、母や教師からのさまざまな影響によるものであることはいうまでもないが、そうした社会的なものを土台としてつくりあげられる個人的なものは、それ自身として、いわゆる社会的な態度などとは質を異にしている面をもつことを見逃してはならない。

したがって、領域「社会」は、一口にいって社会性を伸ばすことなのだ、とかたづけるのは、事態の半分だけのことで、全体を押しはかっている、ということになる。たしかに、これに属するねらいは、たいてい、集団的な生活、社会的な生活をいとなんでいるうちに達成されるものである。しかし、そのねらい自身は、狭義での社会的なものと個人的なものに区別することができる。努力の目標として、単に対人的な関係を向上させるだけでなく、幼児のひとりひとりの内面的な向上をもめざさねばならない。これは全く自明のことでありながら「社会」という領域にいれられたことによって、何かすみっこに小さくなった借家人のように思う人がありはしないかをおそれるのである。

第二の分野は、社会的な、のぞましい習慣や態度を中心とし、第三の分野は、社会的な諸事象への理解を中心とする、と私は考え、それぞれにも、いくつかの問題があると思うが、別の機会に譲ることにしたい。

幼稚園の社会

高橋省已



一、問題の所在

「幼稚園の社会」というとき、まず第一に、問題が二つあると思われる。その一つは、小学校や中学校では「社会科」という教科があるが、これとどんな関連があるかということである。その二つは、幼稚園教育内容として「六領域」というものがあるが、その一領域としての社会は、他の領域とどのような関係をもち、指導としてどんなことを分担し、注意しなければならないかということである。

なお、この二つの問題の外に、現在、幼稚園の社会として指導されるものについての反省すべき事項はないかということも問題となるであろう。

二、「生活としての社会」と「教科としての社会」

第一の問題についての結論を先に記すと、小・中学校の「社会科」は「教科としての社会」であるが、幼稚園の「社会」は「生活としての社会」であると表現すると、その特徴がはっきり把握され

るように思う。もちろん、両者は別個なものではなく、深い関連があることは言うまでもない。小・中学校の教科学習が生活指導を度外視して行なわれるべきものではないからである。

わが国における社会科は、戦後アメリカの社会科の影響をうけて、戦前におけるこの種の教育が根本的に組織替えされ、わが国社会の民主化のために重大な使命を持つ教科として登場したのである。すなわち、わが国の政治、経済、文化の三方面的の生活の中には前近代的なものが介在しているのであるが、この非近代性を克服して、個人の基本的人權を尊重し、自由を確立することを目標としたのであった。この目標のもとに、児童・生徒に社会生活を正しく深く理解させ、その中における自分の立場や位置を自覚させることによって、その社会に適応し、社会の進歩のために尽力させるように指導することにした。そして児童・生徒の成長発達に應ずる目標を設定し、その指導内容を明示し、指導上の留意事項をにかけてい

る。これを見ると、決して知識の獲得や理解ということにだけ終始するのではなくて、生活実践と結びついているように指導されねばならないとされている。それにしても、成長発達に応ずる行動圏の拡大と知的発達に応ずる認知構造の転換によって、上級になるに従って次第に知識と理解が豊かになり、態度、習慣、技能を発展させるように企図している。教科書による教材が豊富になると共に、社会科を構成する教材領域がまとめられて指導されるようになってくる。

ところが、幼稚園の社会は、このような教科的知識や実践ではなくて、文字あるいは文章上の理解が困難な幼児期の特性にかんがみて、あくまで生活実践に徹しなければならない。このような指導であればこそ、「社会科」ではなくて「社会」とよばれるのである。

また、そうあらねばならない。幼稚園の社会は生活実践の指導であって教科指導ではないのである。もちろん、知識をゆるがせにするものではない。幼児ながらも、その知的発達に応ずる知識と理解と洞察を身につけさせることが大切である。しかし、それは自然な生活指導の姿で、社会のねらう内容を獲得させるよう留意されている。生活、あるいは経験による学習である。

三、「経験の領域」と「領域の経験」

次に、第二の問題である領域「社会」は六領域といわれる他の領域と、どんな関係において理解され指導すべきかが問題となる。

これは幼稚園教育要領がまとめられるころに、よく論議された。

すなわち、幼稚園教育というものは、学校教育法第七七条にかかげられた「幼稚園教育の目的」を実現するために、第七八条の「幼稚園教育の目標」としてあげた五項目を、教育実践として如何に展開するかにあることは言うまでもない。そこで、幼稚園教育要領は幼稚園教育の目標である五項目について、更に「具体的な目標」として、五項目おのおのについて展開した。しかし、「幼稚園教育の目標」の五項目が、そのまま「具体的な目標」の五項目として展開されているのではない。具体的な教育指導というものを頭において、整理され、明瞭化されている。社会について言えば、幼稚園教育の目標としてかけられた次の二項目、すなわち、

- (2) 園内において、集団生活を経験させ、喜んでこれに参加する態度と協同、自主及び自律の精神の芽生えを養うこと、
- (3) 身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと、

というのが、「具体的な目標」においては
(2) 幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようになる
というように、整理され明瞭化されている。

これを「幼稚園教育の内容」とする時に「社会」としてまとめられているのである。これが領域「社会」であるが、幼児の発達上の特質を考えて、「社会の望ましい経験」として八項目かかげている。これが「有効適切な経験」というのである。

領域社会のこの望ましい経験は、さきにかかげた具体的な目標で

ある領域社会において、幼稚園教育の目的を実現させるための望ましい経験という意味である。すなわち、形の上では「領域の経験」というようになっていく。しかし、これは「領域の経験」というような発想の仕方ではなくて、「経験の領域」というような発想の仕方であればならない。これは単なる用語の問題ではなく、発想の仕方の問題になるので、幼児教育を理解する上での重要な点であると思われるのである。

すなわち、「領域の経験」という時には、具体的な目標に従って幼児の経験に「制限」をつけるということになる。そうではなくて、こんな目標や領域とは関連なく、幼児はその欲求と興味に従っていろいろの活動をしている。しかし、そのいろいろの活動には、教育の目的に照らして望ましいものと望ましくないものがある。そこで、幼稚園の「具体的な目標」に照らして、望ましいものは何かという観点から幼児の経験をまとめると、「経験の領域」というものとなるのである。

これは教育観を幼児の行動を中心に行っているのか、教育目的を中心に行っているのかの観点の相違のあらわれるところである。「領域の経験」ではなくて、「経験の領域」でなければならぬ。

「領域の経験」ということになると、行動を限定することになるが「経験の領域」というと、幼児の展開する無限の経験のうち、これこれを「社会」という名称でまとめたに過ぎないということになる。これが社会の経験、これが自然の経験というのではなくて、こ

れこれらの経験をまとめると「社会」になるし、これやあれやの経験をまとめると「自然」になるというような考え方をすべきであると考ええる。したがって、領域別は便宜的なもので、固定的ではない。どの目標を達成するためにこの経験が望ましいというような指導ではない。このような発想法をしなければ、幼稚園の社会は「教科としての社会」になって「生活としての社会」にはならない。望ましい幼児の経験というものは、渾然一体となって五つの目標が全体として達成されるようなものである。もちろん、ある行動、あるいは経験は五つの目標を均等に達成するというのではなくて、おのずから濃淡がある。幼児の具体的な生活経験は六領域全部にわたっていなくても、常に幾つかの領域にわたっているものなのである。殊に社会はそうになっている。

したがって、領域「社会」は教科「社会」、あるいは教材「社会」、あるいは「領域の経験」ではなくて、生活「社会」であり、経験「社会」であり、「経験の領域」である。したがって、他の五つの領域と、濃淡・広狭いろいろな程度で交錯しているものと考え、社会の指導は幼児の生活全領域にわたっているとも言える。

四、教育内容「社会」

領域「社会」の望ましい経験は八つにまとめあげられているが、前項のように考えると、望ましい経験は八つに尽きるものではない。幼稚園における幼児の生活は、幼児の全生活の一部分である。大部分は家庭、あるいは父母の膝下にある。幼稚園の教育を効果あ

らしめるためには、幼稚園の教育目的、あるいは目標に照らして整理と整理が必要がある。この有効適切な経験として八つあげられている。理解すべきであろう。

ところが、望ましい経験としてあげられた八項目を羅列的に理解するのではなく、自分のものとして理解するには、自分ながらの観点に立ってまとめることが大切である。

「社会」であるから、集団生活とか、社会生活とかいうことばが書いてあるが、幼児の発達の特徴と教育目標を考えあわせるとき、集団生活、社会生活といっても、この生活へはいるための基礎的能力として、自立性ということを一に考えねばなるまい。自分でできることは自分でし、他人に依存しないということである。基本的自立的生活習慣というものが身につけられねばならない。この習慣の形成は幼稚園の社会指導としては最も基礎的なものである。

わたくしは「自立性」と「自主性」を区別している。自主性ということは、自分で考え自分で判断し、自分のやったことに対しては責任をもつということである。このように言えば、非常に抽象的な表現となる。そこで、この抽象的な理念を、具体的な生活実践と結びつけるところに、自立性があると考えるのである。幼児期のしつけとして最も大切なことである。食事・睡眠・衣服の着脱・排便・清潔について自立性を身につけるといことは、やがて自主的になる心理的教育的基盤となる。

第二は公共性を身につけさせることである。公共性ということの

中には、自分勝手なことをせず、他人に迷惑をかけない、規則を守り、公共の物や設備を大切にすることもある。公徳心を養うことも公共性の一面であると考え、やがてこれは身辺の社会生活に関心を高めさせることになる。公共性の高次の段階として「公共の福祉のために尽す」ということは幼児期にはむずかしいけれども、指導者はその芽生えを育てよう留意することが大切である。

第三は協同性である。協同性というのは、他人との協調ができるということ、他人の立場を理解し、仲よく助けあい、しごとや遊びを通して協力するだけではなく、自分たちの属する集団生活を向上させるよう努力することである。集団生活の向上ということは、「われわれ意識」の発達していない幼児期には困難である。しかし、幼児にも幼児なりに、自分の属する家庭生活において、園の生活において、友だちとの生活において、寄与するものがあるはずである。

五、社会指導の反省事項

幼稚園の社会として指導されているもので根本的に反省されることは、幼児の生活行動について、もっと観察資料を集めるという努力がされていないのではなからうか。その着意すらないのではないかと疑われる。年齢による差、地域による差、伝統による差があるもので、この観察資料に立脚して社会の指導をしてこそ、はじめて十全といわれるべきである。（神戸大学教育学部教授兼付属幼稚園長）

社会性について

辰 見 敏 夫



○ 社会性とは

人が人として生活するということは、人びとに接して、人のつくりあげているもの（文化）の中で生活することです。その意味で、人は社会的動物である、といってよいでしょう。生れたばかりの一人かたまりの肉にすぎないような赤ちゃんでも、人の手を借りて、人の作ったたらいの中で、水道の水で産湯を使い、お母さんのお乳をもらって、大きくなります。つまり、生れたばかりの赤ちゃんでも、すでに社会的な生活を営んでいるということになります。もちろん、そうはいっても、おとなの社会生活を営んでいる、ということと赤チャンが社会的な生活を送る、ということでは、たい

へんなちがいがあります。だいたい、おとなということのもっとも大きな意味は、「話せばわかる」生活をしているということです。話をしてもわからないような人びとは、ですから、おとなのついているこの社会に入れておくわけにはいきません。たとえば、どろぼう、選挙違反というような犯罪をおかした人たちには、「そういうことをしてはいけない」と話しても、ほんとうはわからないのですから、これは刑務所に隔離してしまいます。つまり、おとなの社会から追いだされてしまうわけです。また、精神的疾患をわずらっている人は、話してもわかりませんから、これも病院にいれて、おとなの世界から隔離して遠ざけてしまいます。

子どももまた、おとなの社会にはいれない存在なのです。そこで、幼稚園、小学校、中学校に入れて、（ある意味では隔離をして）「話せばわかる」おとなにしようとするわけです。

つまり、子どもはおとなの社会の中に生れるけれど、おとなの社会にそのまま入れられることはできない、そこで教育をうけ、じょじょにおとなの「話せばわかる」生活に入っていく、そうなる

までを社会性が発達する、というのです。そこで、赤ちゃんからおとなまでのいろいろな段階で、社会性の発達にはいろいろな特徴があります。

○ 幼児の社会性の特徴

昭和三十一年度の幼稚園教育要領で、幼稚園の幼児は、次の具体的な目標を達成するように指導されなければならない、として、

幼稚園内外における身近な集団生活に適応できるようにする。

○身のまわりの始末が、ひとりでするようにする。

○自分の仕事を進んでやり、終りまでやりとげるようにする。

○友だちと、仲よく親切に交わるようになる。

○友だちといっしょに、仕事や遊びができるようになる。

○友だちとの約束が守れるようになる。

○親や教師のことを、注意して聞くようになる。

○幼稚園や家庭の生活、道路の交通、遊び場などのきまりが守れるようになる。

○自分や友だちの持物、幼稚園の物などをたいせつに使うようになる。

○世の中のために働いている身近の人々に親しみを感じ、その仕事に関心をもつようになる。

○幼稚園の行事、家庭や身近な社会の意義ある行事などに、興味をもつようになる。

○道具や機械の便利なことに気づくようになる。

これが、幼児の社会性について期待される一つの内容であると考えてよいでしょう。そこでこういう期待される内容を実現するには、その社会性の発達において、どのような特徴がみられるのでしょうか。教育要領の社会で、幼児の発達上の特質として、次の十項目があげられています。

○何でもひとりでやりたがるようになる。

○自分のものと他人のものとの区別が、一応できるようにする。

○所有欲や独占欲が強い。

○好きな遊びや作業に熱中する。

○同じことがらに対する注意や興味が長続きしない。

○泣いたり笑ったり、情緒の動揺や変化が激しい。

○集団の仲間にはいれるようになる。

○ひとに認められたがる。

○模倣的な行動が多い。

○試行錯誤的行動が多い。

こういう心理的な特徴が見られればこそ、前述をしたような、期待される社会的行動に到達することができるというわけです。

そこで、もっと具体的に、幼稚園ではどういう指導目標をたて、それを実現させるように教育をしているのかをみるために、小川町幼稚園の一例をあげてみます。

3才

一期 園生活に必要な生活習慣をしらせる。園生活に必要な、かんなきまりや約束をしらせる。

二期 先生が橋渡しをしてたがいに交渉できる遊びをみちびく。

三期 勝手な行動をとることが他人に迷惑をかけることをしらせる。

四期 進級するよろこびと自覚をそだてる。

4才

一期 園生活に必要な生活習慣を知らせる。

二期 遊びのルールを知り、小グループながら、集団行動が徐々にできるようにする。

三期 友だちと協力して遊んだり、しごとをすることを経験させ、その楽しさを味あわせる。

四期 協力してある目的をもったしごとをやりとげるたのしさを得させる。

リーダーシップをとる機会をあたえてその芽をのばす。

5才

一期 在園児は年長組になって、自覚と誇りを各自が身につけて行動できるようにする。

二期 それぞれの友だち関係が安定し、おたがいの気持を深めあうようにする。ボス的な行動がみえた時にはみんなで考え

て、よい方向にもっていく。

三期 グループ遊びやごっこ遊びなどを通して、新しい事象を発見する目を養い、その経験を広げようとつとめる。

自分のしごとを完成する。

四期 生活経験を更に深め学校への期待をもたせる。

すすんで手つだいなどができるようにする。

ところで、一般には、この発達上の特質としてあげた十項目のよ
うな面を、社会性とよんでいるわけですが、先にあげたような具
体的な幼稚園教育の目標、もっと実際的には、小川町幼稚園の社
会的なものの指導目標というものをよく吟味してみれば、幼児がこ
う社会生活ができるようになる、という可能性が予想されればこ
そ、それを具体的目標、指導目標としてあげたわけなのですから、
裏返して考えれば、この目標こそは、幼児の社会性の特徴である、
といってもよいでしょう。つまり、小川町幼稚園の例でいえば、
5才の二期頃には、ボス的な行動にでる子どもがでてくるというこ
と、さらに、それをその組の子どもたちが問題として取り上げて、
どうすればよいかを考えることができるようになる、という可能性
があればこそ、それを指導目標として、ボス的な行動がみえた時
には、みんなで考えてよい方向にもっていく、ということがあげら
れているわけなのです。逆に考えれば、5才の二期頃の社会性の特
徴はボス的な行動や、それを問題として取り上げる能力がでてくるこ

とだといってよいでしょう。

ですから、発達上の特徴は、この社会性をとくに、その個人の面からとらえたものであり、われわれが一般に、社会性という表現をする場合には、ここにあげた具体的な目標や指導目標の内容であるといったほうがよいといえましょう。

○社会性の内容

社会性ということ、赤チャンの生活からおとなの社会生活といふことのできるようになる発達の過程であると漠然と定義してきましたが、ここまで考えてみますと、社会性にもいろいろな面があることがわかります。

第一に、人にたよらないで、自分のことは自分でする、とか、仕事や遊びを熱心にやって、おわりまでやり通す、といったような個人生活という面からの社会性があるでしょう。

第二に、先生や仲間の子どもと楽しく遊ぶ友だちに親切にする、というような、集団生活への適応ということが考えられます。

第三に、遊びのルールをまもるとか、順番を待つ、というような社会的なきまりを、たとえそれが素朴なものであっても、まもるという面があるでしょう。

第四に、家庭でお手伝いすることによって母親の役割をしり、行事に参加することによって、社会のしくみをしる、というような社会的な事象への興味や関心、という面が考えられるでしょう。

もっとも、これは理論的におとなの立場から分けてみたわけで、実際に、子どもの行動をみるとときには、それほど厳密に区別し分類されるものではないでしょう。けれど、社会性ということの中には、こういういろいろな面が入っている、ということは注意しなければなりません。また、それであればこそ、社会性の最後の到達すべき点が、おとなの社会生活をいとなむことができるようになる、という定義が下されるわけです。

○おわりに

あれこれと話をすすめていくと、なにか社会性というものが、常におとなの立場からのみ考えられるような印象を持ったかもしれませんが、社会性というものはあくまでも個人の発達の過程なのです。フランスのある心理学者は、社会は個人のうちにある、といっています。この考え方が、社会性の根本的な立場ではないか、と思ふのです。

したがって、社会性がばかに画一的な発達をするように説明しましたが、この発達の面ほど個人差の大きいところはありません。その子どものおかれた環境や教育、さらに遺伝によって、社会性は各個の子どもごとに、その発達に質的にも量的にも差がでてくるのです。この個人差ということはあくまでも考えておいて、教育していただきたいのです。

(東京学芸大学)

友だちといっしょに遊ぶ

浅野 寿美子



社会で強調したいこと

近時幼児教育の重要性が各方面で叫ばれてきました。マスコミも幼児の教育についていろいろの問題点をとりあげ、また家庭でもラジオ、テレビなどの普及にともなって幼児の教育に対する関心が高まってきたことはまことに喜ばしい現象です。

しかしその反面、両親は子どもの成長発達の程度や幼児教育本来の使命を忘れて、将来への期待をかけすぎるあまり、少しでも早く知識や技能を身につけようとおさせて、人間一生を通して幼児の時期でなければ経験できないことや身につけておかなければならないことをなおざりにしてしまう傾向があるようです。

最近ではただでさえ住宅事情や広場の減少、交通事情の悪化などによって友だちや遊び場を奪われて、しぜんに家の中で祖母や母親などを友だちとして遊んだり、テレビや絵本を見て時間をすごすということが多くなっています。したがって、いきおい

この時代に身につけておかなければならない仲間同志で遊ぶことを通して、“自分で身のまわりのしまつをする”、“友だちと仲よく遊ぶ”、“自分から進んで遊んだり、いやなことでもがまんする”、“友だちとの約束を守る”、“物をたいせつにする”などの態度や習慣を身につけることがなおざりにされて、頭でっかちな小さいおとなができてしまします。

ここに幼稚園教育の大きな意義が見出されるとともに、幼稚園としてはこの点にこそ重点を置いて教育すべきだと思います。そこで仲間同志で遊ぶ、つまり友だちと遊ぶということについて指導するうえ留意すべき一端を年令を追ってあげてみましょう。

1. 三才のはじめは人でなく物が友だちになることが殆んどです。三才のはじめは人（おもちゃ）にとり組んで思うぞんぶん遊ばせることがたいせつです。そのためには、幼稚園として遊び場の設

定、時期に応じたおもちゃの種類と数、環境（ふんい気）の設定に全力をつくして、一人ひとりの子どもがじゅうぶん満足感を持てるようにすることです。（この時期に早く友だちと遊ばせようとあせって失敗するとその子どもは容易に仲間に入って遊ばなくなってしまう。）

その後しだいに物を仲だちとして友だちと交渉を持ち始め、友だちを意識するようになる三才半頃からは、遊び場を広げてやり、おもちゃも種類を増して、同じ種類の中の数を少なくしていつて友だちと交渉をもつようにしたりくふうしておもちゃを使ったりするようにしむけることに全力をつくすことです。

2. 四才のはじめから七月頃にかけては特定の二～三名の子ともとなら遊べるようになりますから、おもちゃや遊びの種類などをくふうして二、三名の友だちと交渉を持ちながら遊べるようにすることがたいせつです。

ところが四才で入園した子どもは、まず三才の入園当初と同じように個々でじゅうぶんおもちゃで遊ばせるような機会を少しの期間与えてやるような配慮を欠くと、遊べない子になってしまいますから、この点特に留意する必要があります。

九月頃から一二月ごろにかけて、簡単なルールのある集団遊びができ、これに興味をもつようになって五～六名なら遊べるようになりますから、遊びの内容についてじゅうぶん研究しておく必

要があるとともに、教師の援助のし方、けんかの取り扱い方などに留意することがたいせつです。

四才の終り頃になると、自分の机のグループの友だちや特定の親しい友だちばかりでなく、他の机のグループの友だちなどとも仲間になって遊ぶようになり、また遊びを選んで友だちを求めるようになり、その人数もしだいにふえていくから、遊びが長く続くような用具などに心を配ってじゅうぶん準備したり、遊びがざせつした場合すぐ援助の手をさしのべて続いて行なうことができるようにしてやることがたいせつです。

3. 五才になると身体全体を遊びに埋没させ、遊びの中で簡単なルールを話し合って作ったり、遊びに使う用具などを自分たちで準備したり、役割をきめ合ったりするようになりますが、集団と集団が交渉をもつようになるにしたがって、勝敗の意識が強くなり、それにつれて友だちとの結びつきが強くなる一方、弱い者などを仲間はずれにする傾向も出てきます。また一種のボスも出てきますから、誰でも遊ぶように、遊びの中でトラブルが起つたら自分たちでよく話し合って解決したり、遊具を分け合って使ったり、ルールをよく守ったり、困っている友だちに親切にしてあげたり、リーダーになってもいばらないし、グループの一員になっても進んで協力するような態度を身につけるように幼稚園全体としてあらゆる配慮を怠らないようにする必要があります。

なお、とくに気をつけなければならないことは、とかく教師は遊びの表面にばかり気を取られて、遊びに加われない子、遊びから逃げ出してしまった子、遊びからボイコットされてしまった子を見過ごすことが多いことです。

この子どもたちの次の活動を見ていますと、何か落ち着きがなく、充実した遊びができないようです。また、グループでの遊びが中途半端に終わったような時も、子どもたちはその後の遊びにおいて落ち着きがなくざわざわしたふんい気をかもします。

そこで幼稚園では、一人ひとりの子どもが遊びに没頭し、遊びを自分から作り出し、友だちと強い結びつきを持っていつでもどんな遊びでもできるようにし、しかもそれを楽しんでやれるようにすることが何をおいてもたいせつだと痛感させられます。

先日小学校の先生方との話し合いの時、幼稚園時代に「遊びに

没頭し、遊びを作り出し、友だちと仲よく遊んだ子ども」が小学校でどんな態度をとっているか聞いてみましたところ、「物事をしっかりやる、教師の話を真剣に聞く、人に親切にする」などに発展しているということが立証されてさらに強い自信をもったわけです。

アメリカ合衆国のケネデー大統領は、二月十四日の議会に送った教書の中で、青少年の非行をなくす道は「機会を与える」ことだと強調していましたが、これはたんに非行青少年についてだけでなく、幼児教育についても通じることです。つまり、幼児が充実した生活ができるような遊びの場と内容、および人を準備してじゅうぶん充実した生活ができるような機会を与えることこそたいせつです。

(名古屋市立第三幼稚園長)

幼児の遊びと「社会」

神 沢 良 輔



幼児の生活の中心は遊びであり、それを通して教育していくということは、幼児の教育にあたるものにとっては常識であり、合意ことばのようにもなっている。

しかし、幼稚園という幼児の教育機関において、幼児の教育をしていく場合には、幼児にとっては同じ遊びであっても、家庭における遊びとは質的に相当の差異が認められなければならないだろう。すなわち、すくなくとも幼稚園における遊びにおいては、遊びという総合的な経験を通して、その中に教育的な価値をもつ経験が含まれるように配慮されているだろうし、教育的な価値をもつ環境というものが設定されているからである。

さらに、そのような遊びは、幼稚園においては、同一年令層の幼児をもって構成されている集団のなかでなされているのである。このようなことは、家庭における遊びにおいては認められないであろう。そして、このことは、幼児の教育機関としての幼稚園の独自性を示すもつとも重要な原因と考えられる。

そこで、遊びを幼児の教育機関という場に限定してみると、幼児の遊びの質そのものが、幼児の教育の質に平行しているということになろう。そして、それにもつとも大きな関係をもつものは、幼児の集団の質ということになる。

例えば、数人の子どもが砂場で遊んでいたとしても、あることは砂を掘っている。ある子どもはトンネルを作っている。ある子どもは砂をかためて線路を作っている。そしてそれらの子どもたちの間には何の関係もないというような状態での遊びと、砂を掘っている子どもは、トンネルを作っている子どもと、砂を運んでいる。線路を作っている子どもは、トンネルとの連絡をつけるのに一生けんめいであるというような遊びの状態とでは、相当な差異が認められよう。

すなわち、前者のような集団の状態では、集団といっても、それぞれ幼児がばらばらで、自分だけの遊びを通してのみ経験がなされることになるが、後者においては、集団のメンバー相互の経験の交流の中で遊びが成立しているといえる。そして、このような集団では、どうしても言語の交換が必要になるだろうし、遊びに必要なルールや役割ができたりするようになるだろう。だから、外見的には同じような遊びに見えても、経験の内容は質的に非常に高いものになっているといえる。

このような集団の質の問題は、幼児の経験領域である、いわゆる六領域のそれぞれについても同じようなことがいえる。例えば、“音楽リズム”においても、交替に演奏するようなことは、前者のような集団水準においては学習が不可能となろう。また、“言語”においても、前者のような集団では、話をする必要がな

いので、言語についての経験をすることはないであろうし、もし、話をしたにしても、その話は、集団の成員一人ひとりにとっては承認しなくてもよいことになるので、言語の内容についての質的な向上は認められないことになるだろうし、意味のない一人ごとになる恐れもある。

このようにみえてくると、幼児の遊びと集団の質との関係は、保育そのものを考える上での中心的課題とならなければならないだろう。

これまでのべてきたことは、幼児の教育にあたるものにとって、どうしても押えておかなければ教育できないものに、幼児のそのときそのときの集団の理解と、その発達についての見通しということがあるということである。それは、六領域といわれているもののどれかを中心に保育する場合でも同じことになるであろう。そして、このことは、幼児の経験の質にも関係し、望ましい経験といわれているものの本質的な内容を構成するものといえるのである。

(二)

さて、幼稚園の教育内容として、“社会”の領域で強調したいことは何かということを編集部から要求されて、それを念頭においてこれまでのべてきたのであるが、どうも前述のことは、その

ことに直接結びつかないようなことになってしまったかも知れない。

しかし、すくなくとも、幼稚園における幼児の教育においては、幼児の集団の質とか、集団の発達というものによる経験の内容の質の相異や変化がはっきりしない限り、経験の平板的な面については押えることができるにしても、それだけで幼児の望ましい経験がされたということにはならないだろう。もちろん、実際の保育場面においては、先生方は、幼児ととりくんだ経験をもとにして、幼児の経験の質が向上するように、上手に指導しておられる。だが、このようなことだけでは、この問題を解決したことにはならないだろう。

それで、筆者の提示した問題を、仮に六領域に分けて入れるとしたら、“社会”の領域に入れられることになるであろう。もちろん、この領域においては、他にも入れるべきものが当然ありうるが、このことこそ“社会”でもっとも中心にしてほしいと考えるのである。

なお、現行の教育要領では、このような面に関しては、はっきりした記述はない。だから、ここでのべたことは、教育要領というものが、どういうものであるかということの議論を問題の外に置いての私見であることを付記しておかねばならない。

生活訓練と社会生活の認識

高橋 さやか

いわゆる「六領域」の中でも、カリキュラムをたてる教師側として、保育活動にかかわる具体的なイメージをもちにくいのが、「自然」と「社会」であるといえるようである。

「自然」と「社会」とは、それぞれ「自然科学」「社会科学」から「科学」を外した称呼であろうか。それにしても、かなり漠然とした、またあいまいな印象は否めない。

小さなスペースの中では、カリキュラム論の基本的な問題ととりあげてあげつらうこともできないので、多少の無理や舌足らずになることは目をつぶって（つづらせて）いただくことにして、さし当り、「言語」や「音楽リズム」や「絵画製作」そして「自然」において考えるよりもより多く「社会」において考えることが妥当だと思われる問題について——その中でも重要な側面と考えられる点に、ふれるだけはふれてみたいと思う。

表題に掲げた通り、「社会」という保育……幼児教育の内容を考える場合、生活訓練と社会生活の認識とは、どちらも欠くことのできない要点である。また、どちらも、たいいていのカリキュラム

に、落ちなく、一応はとりあげられているであろう。ただ、私は、私自身の関係している園の場合の反省も含めて、この訓練の面と、認識（を獲得させ、そのことを確認する）面とが、何となく混同され、保育活動の具体的な形の中で、やはり、あいまい不徹底なままに漠然とした存在になっている、と思われるのではない。

もちろん、生活訓練——習慣づけにしても必ずしも身体的生理的な面ばかりでなく、ことに習慣確立までの過程では多分に意識や意志を目ざめさせた上でなされなければならない活動が多く、それはまた当然に、社会生活の認識につながっている。しかし、つながっているからといって、教師側までが、とりあつかいの上であいまいかつ漠然としているならば、子どもの獲得するべき社会性——社会人としての能力（性格・傾向上の調整力も含めて）——そのものが、あいまいとなり、漠然としたものにならざるを得ないであろう。同じ「食事のしつけ」にしても、食器のあつかい方の上達のためには、子どもの認識の向上がなければならぬ。

食前食後の手洗いとか口すすぎとか、或いは好ききらいとかにつ

いては、知識や認識が大切でまた好ましい習慣づけに効果的な役割をもつ面もあるけれども、それ以上に、規則的な反復練習や認識・知識に至る以前の感覚的な問題——条件反射をよび起す素因となるべき、その条件が、考慮されねばならないであろう。

体得しなければならぬことと、理解し判断しなければならぬこと。それは必ずしも同様ではないのである。

整列して行進すること、鑑賞音楽をしずかに落着いて聞くこと、遊んだあとかたづけを整然とすることなどは、どちらかといえば「体得すべき」ことに属している。

必要な自己主張をしたり、喧嘩していた状態から合議ができるようになったり、交通上の注意をしたりというようなことは、そのときどきに「理解し判断し」なければならぬ要素が大きい。

さきにものべたように、これら二つの面は截然と別個のものであるわけではないけれども、教師——保育者のとりあつかいの中で、訓練をするか、認識の獲得に力を入れるか、ということは、おのずから異っている。反省しまた気にもなることは、認識をはつきりさせることが必要なのに、ただ訓練……さらに劣悪な場合は、標語をくり返し暗記させることで片付けようとしていたり、逆に、訓練し条件反射を成立させることが大切であるような問題について、つくづくどと説明——お説教したり、「いいの？」「いけないの？」などと、わかり切った判断をことあらためてさせたり、しているのではないか、ということである。到達したところについて考えた場合、認識や知識から出発したことも、無意識

的な習慣的行動に消化されてしまうのは、ほとんどの事がらについて肯定されるかもしれない。

その意味で、何といっても、幼児期の教育内容としての「社会」は、つまるところ、生活訓練、といつてよい事項で、だいたい70%くらいもみたされる、と一般に見られているのではないだろうか。たとえば、さきの例の、交通安全に関する幼児自身の注意ある行動の問題にしても、たしかに「生活訓練」の一つであることにまちがいはない。

しかし、実際に、交通規則や道路上で起りやすい危険について、しっかりと教え、子どもに知ってもらい、おぼえてもらうことなしに、無意識的に右側通行をし、道路鉦で示された横断歩道を渡る、という習慣を、子どもの中に成立させることは、不可能——少なくとも大きなまわりみちをすることになる。

この点で、「社会」における「知識教育」は重要なのである。社会生活についての確かな認識をもたせることは大切なのである。ただ漠然と訓練したのでは、訓練それ自身も結実しない。だんだんとそのようにならせる……生活経験を重ねてゆく中に、「社会性を身につけさせる」というようなやり方でなくて、しっかりと反復練習すること、意識や意志の働きもあわせて訓練すること、知識を与え、認識を確立させ、自己の理解と判断によつて行動方式を定める能力をもたせること、……そのそれぞれを教師自身が正しい身構えをもって実行することを考えなくてはならないと思う。

(西南学院短期大学)

園での遊び

——その教育的ねらい——

家庭での幼児の一日が遊びによって継続されているように、幼稚園や保育所の生活もまたつねに子どもらさまざまな遊びによって営まれていて、遊びを中心としたこの幼ない子どもらの集団生活を、保育者はどのように受けとめ発展させていったらよいのだろうか、領域社会の場で考えてみたい。

今更言うまでもないことだが幼児の遊びと仕事は、目的のない興味本位の遊びから目的をもった実用的な作業へと移っていく、いわば関連した生活の発展である。特に幼少の子どもらの遊びは瞬間的な興味によって活動が起され、興味がみたされるか障害に当面して完了する。そのような遊びの繰り返しが次第に何らかの見通しをもって行なう遊びとなり、その遊びを継続し発展していくために仕事としての作業も次第に多く含まれてくる。

それゆえ幼稚園や保育所における幼児の遊びは、そこに何らか

友松 あきみち



の目的をもった、例えば子どもの興味性を大切にあつかいながらもそれが次第に努力に変換していくような方向づけが必要とされてくるわけである。幼稚園教育要領をみても、教育内容には大別して遊びと生活指導の二面が用意されていると思う。幼児が望ましい成長をしていくためには、年令にふさわしい経験を重ねて自然に知識や生活技術を体得していくことが大切である。教育要領に示されている望ましい経験の項目はその意味で遊びを媒介とした教育要素を持っているわけで、同時にその経験には誘導されていく方向もまた含まれているはずである。いわゆる人間形成ということばで表現されているところの、保育者の教育的な見通しである。

幼児は幼稚園や保育所の集約された集団生活の中で、遊びを通じて自己の力を次第に測定していく。自分の可能性を知ると同時

に年令的な成長の限界、時には人間としての限界を知るであらう。遊びを通じて生活のわきまも生じてくるのである。だがあくまでも、日々に成長していくものの前途にはつねに豊かな可能性と創造性が脈うっていなければならない。時には遊びの中で自分の意志を通してみることも必要であらう。冒険もしなければいけない。賞賛され愛され、時には嫌われることもあってよいのであらう。大事なことは、子どもらの背後にあってつねに子どもらを見守っている保育者が最後に彼らに何を与えるかである。

入園を希望する家庭調査の多くには幼稚園教育に「社会性をほすこと」を期待していることが高位にあげられているが、単に一時の流行語と見すごしてはいけまい。今日の不安定な社会が家庭の中にも教育上の困惑をもたらしているように、実際の現場においても確信をもって人間形成の教育にあたることは決して容易なことではない。社会性をのぼすということは、はたして如何なる人間をつくることであるのか——、幼児期の遊びの指導ひとつを取りあげてみても、教育計画をつくることの容易でないことに気づかされるのである。

ソ連の就学前児童教育誌にメンジェリツカヤという人が幼児の遊びと指導について書いている。「幼児の個性は遊びによって発達する。知識も感情も道徳性も、すべてが遊びを通して相關連した一つの統一体として発達する——」保育の場での遊びのあつか

いの重要さと、それゆえの配慮について述べているのであるが参考になる面があると思うので次に文中の一、二を要約しておく。

「幼児の個性の発達ほまさに周囲のものと親しむこと、そのことが基礎になっている。遊んでいる子どもはおとなの真似をし、いろいろな役を演じ生活のさまざまな現象を描く。その場合幼児は何を描いたらよいか、遊びがその子に課している問題をどう解決したらよいか、実際に対象の特性をどう考えたらよいか、いろいろに思案するだろう。このように幼児の遊びの中では、周囲についての観念と理解が発達することが大切なのである。それは同時に、その問題を通じて道徳性も形成されていくのである。役割を演じながら、幼児はある人物の行為を真似するばかりでなく、感情とか印象、或いは人々や労働に対する彼自身の態度も伝えているであらう。このように遊びの内容や配役によって、幼児の感性、関心、人生への態度が形成されていく。また集団労働とか人々の友好関係が彼らの友情も養っていく。このように遊びの内容は、幼児の知能の発達や道徳性の育成にも大きな影響を与えている。遊びが子どもの知能と道徳性の発達にとって有効であるためには、教師はまず遊びのテーマの選択と筋の運びに心を配り、子どもの行為や彼ら同志の関係、配役などを見守らねばならない。もとより遊びの自然さと喜びを保つために、その遊びの指導に強制があつてはならぬけれども……」

「年長児の遊びの選択は、集団とか友情を育てる上で重要である。多くの場合一人の子どもが遊びを思いつき、残りの子どもたちが彼に従う。しかし、一人の子どもが他の子どもを抑圧するようなことを許してはならない。教師は子どもらに注意深く見守り、おとなしい子どもも提案も取り上げるようにしなければならぬ。誰でもが遊びを思いつく権利があり、誰のものがよいかは集団が決めるという精神を少しずつ養っていかねばならない」

メンジェリツカヤは幼児を社会生活に親しませるためにどのような創造的遊びをさせたらよいか、遊びの役割についての共同研

問題児の側から

幼稚園や保育所が、子どもの社会性を伸ばした役割は、非常に大きいものがあった——この十数年を振り返ってしみじみ思われることです。この二つの施設における教育が、子どもの社会性を伸ばす推進力になったのか、親たちのニーズが高まったことに

究を続けている。上掲の個所ではとくに遊びの指導面について触れていることが多いが、労働に対する理解とか友情の発展についてかなり特色をもった道徳性の育成が教育の根幹に流れていることを感じさせる。国情の違いによって教育の方法に多少の差異はあるけれども、教育観とか人間観の確立が保育者の意識の上に必要であることを考えたい。近く幼稚園教育要領も改訂されるというが、その意味でも思慮ふかい配慮のもとにつくられることを期待したいものである。

（神田寺幼稚園長）



平井信義

応ずることになったのか、おそらく両者が相俟って、よい結果を生んだと言えましょう。小学校入学式の折に、泣くような子どもは殆どなくなつた——というのが、長年小学校教育にたずさわつてこられた先生方のご感想であります。

子どもの社会性を考えるとき、三つの要素が頭にうかんできます。一つは、社会の中で他人の助けをかりずに行動するのに必要な独立心であり、第二は社会に広く目を向けそれに興味を感じる心であり、第三には、社会にある約束を守ることを通じて、他人の心を思いやる心だと思います。これらが、幼児教育の中でどのように養われたか、とにかく、子どもについての相談を受ける立場からみると、再び新しい問題が生じていることが感ぜられます。

① 独立心を望む余りに

近頃、子どもの独立心を望む余りに、親たちの要求が高くなり、正常に発達している子どもまで問題児にしてしまっていることが少なくありません。返事にとまどったり、はずかしがるという態度を示すと、それだけで独立心のない子どもと考えて、相談にくる親たちが多くなったのです。私も毎夏引っ込み思案の子どもの合宿治療をしています。引っ込み思案で困ると訴えられていた子どもたちが、我々の目からみるとかなり積極的な行動を示しています。殊に、お母さんから離れると、積極的になる子どもが多いのです。つまり、お母さんの要求が強い一方、引っ込み思案な子どもだと思ひ込んでいるお母さんのとりこになっている子どもが少なくないのです。

独立心への要求は、幼稚園や保育所の先生方にも強くなっているのではないだろうか。小学校の先生方が問題児を考えられる場合には、引っ込み思案の子どもが浮かんできることが少ないのですが、幼・保の先生方ははるかに多く引っ込み思案の子どもの問題にされています。教育の形態からくる差もあると思います。が、先生方の意識の差もあると思います。

② 独立しすぎる——ということ

西ドイツの幼稚園を何回か訪ねたときのことを思い出します。西ドイツでは幼稚園と保育所とは制度の上では別れていないので、私が訪ねたのは我が国の形からいえば、保育所に相当する幼稚園でありました。その子どもたちの行動をみると、我が国の子ども以上に独立心がさかんことがわかります。私は、半ば褒める気持を含めて、そのことを先生に言ってみたのです。

ところが園長の女の先生は、

私は、実は、余りに独立しすぎていることを危険に思っています。独立心は大切ですが、その背後に親から離れていることが多いという問題があると、たいへんだと思います。親子関係が薄い子どもは、社会的には独立しているようであるけれども、暖い人間関係を作り上げる感情に欠ける恐れがありますからね……」

この答えは、既にホスピタリズム（施設病）の研究者たちが指

摘しているところですが、私もそれを知ってはいたのですが、こうして保育者の口から直接きかせられると、心に深く残ることでありました。

現在、社会の教育施設や保育施設が充実するにつれて、家庭における子どもの生活が少なくなってくる傾向が増しています。お母さんたちが働きに出たり、社会的に活動することについては、いろいろな理由から、賛意を表している私ですが、一方、家庭というものが大切であることを思うと、母と子や父と子が、ゆっくりと接触し合い、お互いに人格を反映し合っていくことが強く望まれるのです。子どもを育てる楽しさ、及び家庭というのは、そうした子どもとの接触によって実現できる面が大きいのですから……

③ ルールを守る気持を。

現在の我が国の混乱が、その一面ではお互いのルールを守る気持が少ない人たちが増加していることにあることは、否定できないと思います。その点で、幼稚園・保育所において集団の持つルールを守り、ルールが大切なことを身につけていく子どもが増加していることは、非常に大切なことと思います。

しかし、子どもの相談施設では、ルールを守る気持の少ないことに原因する子どもの問題がふえています。社会性のない——と

いうことで、その原因を探りますと、家の中で子どもと共に守り合うルールを設けてなかったり、子どもの言いなりになっているご両親が少なくありません。それが幼稚園や保育所に持ち込まれ、保育しにくい子どもの姿となって現れているのです。

一と昔前は、家族制度や封建制度を背景としていたとは言え、家庭の中にルールがあつて、それを守るよう厳としてしつけられたものです。古い家族制度はもはや認めることはできませんが、新しい家族共同体の中のルールをきめて、それを守る気持を育てていかなければなりません。それには、新しくルールを作り出すことも、考えなければならぬと思います。その気持が、やがて集団に入つて、集団のルールを守りながら、新しいルールを作り出す力となるのです。それを具体的に実現するには、もつと日常生活の中で、その運営に参加してもらうこと。いわばお手伝い——ということにもなりますが、古い意味でのお手伝いではなく、家族共同体の運営という意味で大切なことと思います。それが、子どもの遊びと異質にならないように工夫されれば、子どもの社会性は、すばらしく伸びていくでしょう。

そのような家庭指導も大切ではないでしょうか。

(お茶の水女子大学)

*

*

*

ひとりで立つ

広岡キミエ



① はじめに

幼稚園教育の何よりの意義は、子どもに社会を与え、それを経験させることにあります。どんなに豊かで、教育的配慮も充分である家庭にも、これはなく、どんな貧しい幼稚園にも、これがあります。そうして、これが社会に生きる人間の人間を育てる最も重要なものです。——というようなことは、誰もが言い、誰でも知っていることです。ただ私は、保育の場で「社会」ということばに出あうたびに、頭の中で、一通りこの基本をおさえていないと、足が前へ出ない癖があります。

というのは、「社会」で学ばせようとするもの、という段になるとあまりに広汎でばらばらで、しかもなお、何かもの足りない思いがするのです。その内容というのは、ある時は

- ・「望ましい日常生活習慣の躰」といったもののようであり、
- ・「集団生活の規則を守る事」みたいでもあり、
- ・道徳教育の萌芽として精神的なことが論じられることもあり、
- ・性格調査や、その矯正法みたいなものもあり、
- ・友だち関係や、それをうまくやっていく何か条かであったりもします

これらはみな「社会」の内容であるし、みな大切に果したいことばかりです。しかし、現実にはどの一つでも容易ではないのに、なおこれをみな並べてみても、何か満足しないというのは何でしょう？

② 「社会」を学ぶ端緒

さて、お話を子どもの側に移しましょう。家庭という城壁の中

から這い出た子どもたちは、どのようにして社会を学んでいくのでしょうか。

① ひとりで立ち上る

・入園の最初の幼児の状態は、母親のひざからはなれて、またよたしなながらもひとりで幼稚園にやってきて、わずかな間でも、母親との紐帯を断つて、ひとりで他人の中に残った、という状態ではないでしょうか。

入園当初、四才児の受持は、「日本語が通じない」と驚きました。

・子どもの前に好きな玩具を置いて「遊びましょ」と誘ってみても、一回や二回では手を出さない。「立って」「坐って」という事でさえ、なかなか通じないかのように反応がおそい、というのです。

これはけっしてことが通じないわけではありません。今までは母の袖のかげにいて、そこから外界をのぞき、母親を介してものを聞き、諸事母を通してまかっていたのでした。それが、ここでは全く知らない他人のことを、自分でじかに聞きとり、判断し行動するのです。ほんとうに聞くということが始まったのです。このことは小さなことではありません。大切な、自立の門出です。

② 他人に気づく

・ひとりの子が、せっせと積木をならべてレールをのばしていきま。後で、別の子がその端から一つ一つ積木をとって高い塔に

積んでいきます。全く別々、無縁の世界です。やがて、ふとお互いに気のつく時がきます。

・ふたりの子どもが、同時に、一冊の本がほしくなりました。両方からハッと手を出すとひっぱりっこが始まり、どちらもゆずりません。お互いは、「これは僕のだ」と思いこんでいるのです。家庭ではいつもそうでしたから、思いもかけない抵抗にあって、相手が見えます。こうしたようなことが、日に小さきまがまあって、あの自分のことより他、何も考えられない子どもたちにも、少しずつ他人の世界が入ってくるのです。

③ 他者の中で自己を立てる

ここでいきなり、他人と仲よくとか、ゆずり合うとか、力を合わせてとか、一気におつかぶせては、少し飛躍が過ぎましょう。

「ひとさまのご迷惑になりますから」と歌のようにいって、何も知らない子どもが或る年いました。子どもにこういって訓す母親の顔が見えるような気がしました。まだまだ、ひとさまの事など思えるはずもない子どもに、こんなことばだけ教えてみてもむだです。何といってもまだ自己中心的な子どもたちです。今やっと、よたよたと立ち上りかけたばかりではありませんか。

しかし他者が見え出したのですから、これは大切に育てなければなりませんし、この他者との出会いが、危なっかしい自己の足もとをしつかりさせるのたいへん役立ちます。自分とちがうものにあつて、自分がくつきります。そこで、「自分はこうだ」

と打ち出せるようになったら、これはたいへんしつかり立つことになります。

◎ 自己を確かに立てていくための保育

① 自分で遊びをみつさせる

入園の最初、私たちはいろいろな玩具、材料を用意して子どもが自ら手をのばして遊び始めてくれるのを待ちます。少したつと、いろいろの遊びの種になるものを用意します。それはいじって遊べる小虫や、小さな宮みをもつ小鳥や花や、その物語りなどです。自ら選びとった遊びの中では、子どもはいつも主人公です。自主の人です。

② 表現活動を励ます

みたちの、聞いたこと、ふれたもの、感じたこと、何でも、みな表現に出させます。「僕はこうみた」「こんな気持ち」「私はこう思う」と、ひとつひとつ出させていきますと、その対象がしつかり扱えられると同時に、自己というものも確かになっていきます。しかも、表現には、受け手が必ずありますから、それに認められるようにします。友だちや先生に解ってもらおうということが要件です。認められるということは、裏を返せば、自分も受け手になった時、その地点では、解って認めることができるということです。よく表現する子は、必ずよくみる子です。指導書のリズム表現やお話の項に、「ひとの話をよく聞く……みる」など

とあるのは、けっして外形の問題ではありません。

③ 時々、大きい集団活動に参加させる

少しずつ自覚的に育ってきた子どもたちは、自由遊びにおいてだんだん大きいグループ活動をするように成長してくるのが普通です。（その最も美事な開花はおしばいごっことなるのですが）が、その道程に、時どき大きい集団活動の場を計画して、子どもたちの社会性を強靱にするようにも考えています。数回の園外保育や運動会というような全園あげての大集団活動はそのチャンスです。そんな場で子どもたちがけっして自己を失わずに集団に参加し、その上に大合奏の感激を味わい得るものとしたいのです。日々の集団降園などもまた、子どもがたいへん鍛えられる機会です。もし子どもたちが自覚的でなかったら、都会地では、長々と並んで歩くことなど、かえって危険でありましょう。こうして集団の中でも、個々はちゃんと生きており、喜んで規律に従うことになるのです。

◎ む す び

結局、保育の「社会」の場で、一番大事にしたいことは、自己を立たせることです。

あの、ひよわい子どもたちが、しなだれかかったり、よっかかったりしないで、またまたしなながらも、ひとりで立とうとするのを励ますことだと思います。

（大阪市立律吉幼稚園）

「社会」でねらうものとその指導

舟 本 哲 朗



昭和三十年度に「幼稚園教育要領」が示された時、その六「領域」についていろいろな批判が出た。小学校における「教科」とは性格の異なるものであることが強調されているけれども、このことがすっきりしないし、誤解を受ける恐れがあるということも、批判の一つであろう。

しかし、幼稚園教育要領をよく読み、これを小学校学習指導要領と比較してみれば、六領域の意味はよくわかる。だから、「うわすべり」の読み方をしなければ、実は誤解の恐れはないといえる。領域のワクで指導すべきものでないということは、内容をよく読めばすぐわかることである。このことは、「社会」の領域では特に注意を向ける必要がある。

「社会」の領域がどのようなねらいや内容をもっているかということは、学校教育法第七十八条の第二項・第三項（幼稚園教育

要領二ページ）、幼児指導の具体的目標の第二項（同書三ページ）、幼稚園教育の内容第二項（同書九—一二ページ）に示されている。これらの中には、表現は簡単でも内容的には多くのことがあっている。しかし、ここで述べようとすることは、それらのすべてについてではない。ここでは特に中心的重点的にねらうべきものと、指導について特に強調したいことについての私見をまとめることにしたい。

ねらうもの

「社会」ということばが「個人」と対立するものであるような感じを与えることは事実である。しかし、このように考えることは正しくない。社会の中の個人であり、個人の集った社会であるというのが、社会と個人との関係だからである。

さて、幼稚園や保育所で「社会性」ということばがよく使われる。このこと自体は結構であるけれども、そのことのために「個人」の忘れられているのをよく見かける。その結果として、自身のおぼつかないのに他人へのおせっかいをする幼児が多かったり、幼児の集団が支配者と被支配者との関係になったり、依頼心の強い幼児ができたりしている。教師や保育の多くは、「既製品」のような幼児をつくらうとし、また、幼児を「個人」として育てることを忘れて、せっかちに「社会性」ということをあせり、おませな幼児をつくらうとしている。

「社会」の領域がねらうものは、決してそのようなものではない。「社会」のねらいは、要約すれば「集団生活への適応」ということになるが、その前提として「自主」「自律」ということを忘れてはならないし、集団生活においても、常に、集団の中の「個」ということを忘れてはならない。「幼稚園教育要領」の内容を例にとれば、「自分でできることは自分でする」「仕事をすすめる」の二項目が前提的な基礎として考えられ、自主・自律の精神を育てるとともに「個」の確立がはからなければならない。「友だちと仲よくしたり協力したりする」という項目は、このような前提的基礎に立って、集団の中で常に「個」を育てる態度を忘れずに指導されるべきである。基礎をつくらずに仲よくとか協力とかいったことをせっかちに考えて、形式だけをつくらうとしては

ならない。次に、「きまりを守る」ということは、集団生活においては必ず身につけなければならないことである。それだけに、この項目は、最初の二項目とともに、完全に習慣化されなければならない。いうまでもなく、きまりということは、他人との関係においていわれることである。しかしこの場合も、「個」を忘れるものでないことを強調しておかなければならないだろう。なお「物をたいせつに使う」という項目は、以上四つの項目と並行して考えるべきものであろう。

このほか、「幼稚園教育要領」では、「身近の人々」「道具や機械」および「家庭や近隣の行事」がとりあげられている。これらの項目は、集団生活への適応のための、関心や態度を育てるためのものである。知識を要求するものではない。

指 導

はじめに書いたように、これらの内容は、領域のワクで指導すべきものではない。またできるものでもない。「幼稚園教育要領」では、「社会」に属するまとまった活動の例として、いくらかの「ごっこ遊び」と「見学」と「行事」をあげている。しかし、これらの活動は、「社会」の領域だけで考えるべきことではない。また、その他の内容のほとんどは、まとまった活動があげられていない。これらのものには、他の活動に付随して行なうものが多

いのである（付随は軽視の意味ではない）。したがって、「社会」の領域で考える内容は、多くが他の活動に付随して行なわれるものであり、一部まとまった活動を行なうものについても、常に他領域との総合的な活動となるのが一般原則でなければならぬ。例えば、「仕事をくふうしてする」といった内容は、それ自体の活動ではなくて、「絵画製作」その他の内容を中心とする活動に付随して指導すべきものであり、「売屋ごっこ」のような活動は、「自然」「言語」「絵画製作」などとの関連において、総合的に考えるべきものである。

一般的に言って、「社会」の指導はうまく行なわれていない。それは、この領域のもつ右のような特徴からきている（付随的に

指導すべきものが多い）ことと、「社会性」へのせつかな態度からきていることによると思う。

最後に、幼児の社会性といわれるものは、まだその「芽」に過ぎない。真の社会性は、八才ころ（小学校三年ころ）以後をまたなければできてこない。先日ある幼稚園の「自由遊び」を見せてもらったが、四才児では「仲よく一人ひとり遊んでいる」という状態ではない。このことを正しく認識し、集団の中での「個性」を育てるということを忘れないで、あせらずに「芽」をたいせつに扱いたいものである。せつかくの「芽」を摘み取ってはならない。

（島根県教育庁指導主事）

温かくしかもキリツとした保育者の姿勢



堀 内 康 人

広い目で見て、小学校などになりますと、こちらの小学校とあちらの小学校とで行なわれている教員の仕方や内容に著しい違い

がある、などということは、余りお目にかかる機会はないのですが、それが幼稚園や保育園になりますと、ひとときわ目だっ

るか、月とスポンの違ひのようなものを、私共はしばしば経験させられ、これではまだまだだなあという極めて複雑な気持ちを抱くことがあります。幼児時代の教育で一番大切だといわれ、またそうだと思う基本的生活習慣の樹立などという事が口やかましくいわれていながら、具体的には、「これではとてもそうした生活習慣の樹立ができるはずがないではないか」と大声をあげて叫びたくなるような保育環境で保育が行なわれているような例がたくさんあります。

まずこんな基本問題から考えていかねばならないと思います。が、ここではそうした問題はいわずもがな、のこととして、幼稚園や保育園の教育内容としての社会、その中でどんな事を一番強調したいかについて、思いつくままに述べてみましょう。

その前に私は常々考えているのですが、幼児の教育にたずさわっている人の中には、自分の仕事を、幼児の生活活動のアシスタントか、もっと悪くいえばセクレタリーぐらいにしか考えていないような人が、まだまだたくさんおられるような気がするのです。これでは話しになりません。こんな先生はいつもちょこちょここと、こまめに幼児の活動の尻拭いはやりますが、幼児の活動を指導することはできません。先生たちは申します、幼児の自主的活動を尊重しなければならぬと、全く馬鹿の一ツおぼえとはこのことではないでしょうか。子どもたちが二、三名でたいへん積極的に

積木遊びをしています。そこへ疾風の如く例の○○君がチン入して来て、傍若無人にせっかくできたお船をメチャメチャにけちらかして行こうとします。そんな時に「あらいけませんわね」などということでこまかしの教育をやっている人を間々見ることがあります。ことが適切かどうか知りませんが、「温かくてしかもキリッとした姿勢」をもっと多くの先生方に持ってもらわねばなどという気持になります。子どもたちは本来活発そのものであることもよくわかっています。しかしそうだからといって、人の迷惑も考えないで、人がたいへん悲しい気持になるのもかえりみず、ついつい活発にかきまわってしまった、そんな事がいつも放置されているようなしまりのない保育を見ることがありますが、こんな現場に出つくわすと、見ている方でスポンのベルトをギュッと一にぎりほど固くしめたくります。保育室の中では誰ひとりとして大声でガナリタテズ、みんなの瞳がきらきらと輝き、手足が活発に動き、あちらでもこちらでもほほえましいお仕事を展開し、相談と子どもらしい理解が成立し、それにもとづいて可愛らしい協力、それが時には驚くほどの、或いはおとなたちをしてあつといわせるような成果をあげるような場面へと発展する、保育室からお庭へ出た子どもは思いっきり伸びのびと自由活発に大声をあげて走り廻る、私はこういったはじめのある教育をしたいと思ひます。

こんなことで大体おわかりかと思いますが、子どもたちに幼稚園や保育園で豊かな中味のある生活経験をたくさんさせるには、集団生活なのですから、どうしても最初から徐々に、子どもの年令に応じた生活のけじめ（規律）を与える事が大切です。お部屋の中や廊下では走らない、お友だちのやっている事を邪魔しない、机の上にのらない、上靴のまま外へ飛び出さない、まだその他いろいろな事がありましようが、こうしたとりきめ、お約束をさいしょのうちにきちんとつけておかないと、一年中同じ注意を繰り返すだけでなく、そうした事によって子どもたちの生活経験がいつも歪められてしまいます。秋や冬になってもまだ「机の上のつてはだめです」などとヒステリックな声を出して注意しないでも済むようにしたいものです。

次の段階で私はなにを強調したいかといいますと、子どもたちが自分たちで、共通の課題を、協力して見事に解決して行く場面の適切な指導、それにもとづいて、どの子どもでもみな生き生きと、あらゆる種類の活動に入っているような指導を大切にしたいと思います。

こうした指導は、保育者が子どもの個々にわたっての性格的特徴、興味や関心そして理解の程度、なにがどの程度までなされておき、なにがまだやり残されているかなどについての正しい認識がないと、とてもできないことです。「誰それちゃんはあれをや

ってしまつて下さい、誰君はこちら、誰君は誰君を呼んできてちょうだい」といった保育者のさばき方の、おたおたしないで明解なやり方は、子どもたちに実に見事に反映します。行動的で、やることににもむだがなく、何事も親切に、根気よくまとめていこうとする努力、そういういたものを幼児時代からしっかり身につけさせるようにするためには、まず保育者がそうしたやり方の模範を示さねばなりません、それには、ここでもまた温かく、きりつとしたことばの所有者にならないとだめだと思います。子どもたちはそうした働きかけを繰り返しているうちにさまざまな人間関係や事物現象間の関係把握をそつなくできるように発達するのだと思います。

保育内容としての社会では子どもたちを取り巻く人間や社会の諸事実の間の関係把握を頭の中でも行動の上でも正しくする事ができるように導びいてやる事だと思っています。（東京家政大学）

日本幼稚園
協会主催 幼児教育講習会（予告）

期日 昭和三十八年七月二十二日（月）～二十五日（木）

会場 お茶の水女子大学講堂

第一部（午前） 幼児教育の内容、幼児期と人間形成、日

本の子童福祉など

第二部（午後） 幼児の創造性を培うあそび

—— 詳細は次号に発表いたします ——

米 国 に お け る 社 会 科 教 育

ソーシャル・スタディズ

黒 田 成 子

わが国ではいわゆる「社会」の指導書も出ようとしている今日、いまさら米国の Social studies をとりあげるまでもあるまいが、報告書のようなつもりで書いてもよいとのことで、いささか旧聞のレポートではあるがこの機会にまとめてみることにした。

まず米国の Social studies (以下かりに社会科とよぶ) とは何であるか。日本の六領域の中でとりあげられている「社会」は集団生活における協調および自主・自律の訓練と社会機能に関する面であるが、米国の社会科というのはわれわれの「社会」よりもはるかに広い解釈がなされている。

この解釈の仕方が各州によって異なるが、カリフォルニア、オハイオ、ウィスコンシンなどいくつかの州から出されている定義を綜合してみるとつぎのような一致点がみられる。

社会科とは人間と、人間をとりまく社会的、物的環境との相互関係であり、また人間同志の関係を扱う研究である。

社会的環境といえば、人間の創り出した生活習慣ばかりでなく、法律、芸術、宗教、貿易、経済、文化、伝統などと人間社会全体を含めて考えられるのである。また、物的環境とはすべての動植物、鉱産物、気候、空気、地球、宇宙などを含むものである。

これらの環境は静止しておらず、たえず変展しつつあるものであるが、こうした環境の中で人間がどのように生活し働いていくかというそのプロセスに脚光をあてるのが社会科である。こうなると幼稚園や小学校の社会科といってもその複数の名称が示しているとおり、四年に一つの分野の研究にとどまるだけでなく歴史、地理、政治経済、人類学、社会学、自然科学、芸術の分野にも関係してくる。これらの学問は生きた人間の生活とのかかわりにおいて随時社会科の研究にも必要となるわけである。

次に社会科にちなんだいくつかのことをとりあげてみたい。

Social science も人間関係の問題を扱っているが、これは社会科学的な学問の分野として研究するものである。おなじ人間関係の問題を扱うにしても社会科では Social science の一部を生徒指導の目的のためにカリキュラムの一領域としてとりあげるものである。

Social education といはしはしは社会科と同意語につかわれるか、社会的発達に寄与するすべての学校活動を含むものである

Social learning は Social education より広く、学校といわず社会的発達に関係するすべての経験の事をいう

理想的な社会的態度や概念は単に社会科の教室だけでなく、運動場においても町においても、子どもが人とかわるすべての経験からおこる。社会科は単に知識を与えることか目的ではなく、子どもの個人的発展に尽すことが重要であるのは言うまでもないことである。

米国の社会科の大きな特長は民主社会におけるよき市民の形成ということにある。小学校や幼稚園においても毎朝国旗に対する敬礼がある。日の丸の国旗と少し遠くなっている日本の子どもたちと比較して複雑な気持ちしてくる。

次に社会科が全体の教育目的にとのよう貢献しているかについて考えてみたい。Michaels によると自己実現、対人関係、能率増進、市民教育と四つの点をあげている。

1. 自己実現

社会科というととかく集団の面だけが必要以上に重要視されるが、ここでは集団の中の、単位としての自己の大切さをとりあげ、自己の確立、自己実現ということがまず根本とされている。

言語や数の能力、クルーフ行動の技術も、集団の中で個人が成長発達することにおいて意義づけ、その他観察、構成、演劇、発表、

評価などすべて集団の発達と共にひとりひとりによって充たせようとしている。

もちろん自律、協調、責任感という点も考慮されている。また、健康については各個人の健康と共に集団生活における保健の問題を重くみている。

2. 対人関係

交友関係、友誼、協調、礼儀止しさが重要とされ、またとくに他人や他人種、他の国家に対する尊重とか共感的な感情を養う活動が行なわれる。たとえばお家ごころのような單元においても家族の中のそれぞれの役割について経験させたり、家庭というものに對する意義を知り認識を深める。共同活動することによってクルーフ意識を高め、教室の暖い雰囲気はよい対人関係をもたらすものになると思えられる。

3. 能率の増進

社会科の教育により好ましい態度や理解力、よい技術かりえられ、それかひいては物を扱ううえに能率増進をたらせると考えられている。まず能率的な仕事のやり方や勉強の方法を身につけさせ、これを習慣つけていく。またいろいろの仕事の役割のあつことをしらせ、どのようにして責任を担うべきかが指導される。

さらに地域社会に貢献する働き人について学び、その仕事とよりくみながら、子どもたちは消費生活者としての知識と問題を与えられていく。こうした経験を通して将来家庭や学校、地域社会におけ

る有力な社会人が育てられていくのである。

4. 市民としての責任

グループの責任ある一員としてグループの目標到達に参与することはひいてはよき市民となるための根本的な態度が養われていくことになる。そしてグループの中にあつたといふ意見の相違があつても相手の問題やニートを知り、互に助け合つていくことの訓練がなされていく。また地域社会や国家祭日の行事にたずさわらせ国民意識を高める経験をもたせ、さらに国の憲法や法律に対する関心と尊敬を養ふ。

このように社会科の目標は米国における教育目標と合致して民主社会におけるよき市民の育成に重点がおかれている。

各州では社会科の目的をいくつか掲げ、いずれも民主的社会人の育成を強調した十項目から二十項目にわたる相当長文のものが多く、米国では公教育の中にいっさい宗教を持ちこまないたてまえになつてゐる。しかし多くの社会科の目的に眼を通してみるとそこにはわずかに二百年の伝統ではあるが、ヨーロッパの宗教思想を背景とし、これに加えて建国の精神が脈々と流れていることに気がつく。人と人の和合を説き、自然の美をしらせ、勇氣と創造性をもつて開拓に進ましめ、人間に与えられた知識と力を建設的につかい文明の発展に貢献する人材を育成しようとしている。その成果はともかくとして、目的や目標を重要と考えそれに相当の力をそそぐやり方には示唆されるところがある。こうした目的のあとに行動による具体

目標が続いて記されているのが普通である。しかしそれ以上展開をこまかくすることになると、全く十人十色で日本の教師たちのように克明な指導計画を毎週や毎日書いたりすることは比較的少ない。

次に社会科の内容についてであるが州とそれぞれの学校によつて相異があるが、幼稚園と小学校低学年は高学年より共通性が多い。

a 幼稚園および小学校一年

家庭、学校、地域社会と働き人、行事、祭日、飼育物、旅行、ままこと、共同作業、健康と安全、牧場、動物園、サーカス、お店、のりもの、玩具屋、ガソリン、スタンプ、通信 など

b 小学校二年

地域社会と働き人、私たちの町、郵便局、図書館、消防署、汽車、トラック、飛行機、ハン屋、牧場、きもの、家、住居、厚生と安全、祭日や行事、交通、通信、遊び、動物 など

c 小学校三年

地域社会、遊び、教育、船舶、衣、食、住、偉人、祭日、お百姓さん、季節、インディアン、米国の開拓者、海外の子ども など

d 小学校四、五、六年

外国について、宗教、交通、通信、産業、職業、衣、食、住、インディアン、開拓者、偉人、宇宙時代、時事問題、

ヨーロッパ、アメリカの歴史、地理、気候、公民、デモクラシーの成長、憲法、地域社会 など

幼児や低学年では近辺の環境に関したものが多いが高学年になると公民、米国の歴史、憲法、州の歴史、州の憲法などを何単位履修させること、あるいは祝祭日の指定（リンカーンやワシントンの誕生日、植樹祭）などが法的に指示されている。従来社会科ではインディアンや米国の初代文化に関する勉強が少なかったが、昨今はこうした面を内容として扱うことが少なくなった。むしろ自分の住んでいる町や州の問題、宇宙時代、ラテン、アメリカ、国連や世界の問題、毎日の生活に科学性がどう働きかけるかなど子どもをとりまく生きた問題が興味の中心としてとりあげられている。ソ連に對抗する意味ばかりでもないが、宇宙科学時代になってきているので自然科学の基礎訓練が強調されている。

さて最後になってしまったが幼稚園ではどのような社会科の学習が行なわれているか少しふれてみたいと思う。

米国の幼稚園といえば小学校へ入学する一か年前の年長児をあげるものでほとんどが公立小学校の附属であることは周知の事実である。これらの幼稚園も保育方法は種々であるが、一般に見られることはいわゆる全員が集合する朝の十五分ほどの時間以外は解体した形態がとられ、形式ばらない保育がゆるやかなテンポで流れている感じがする。

いろいろの家具や道具がおかれ、子どものリビング・ルームとい

った感じのホールのような広い保育室、しかも二十五名前後の人員では気分もおだやかに保つことができるだろう。保育室の一隅ではおもまごことがくりひろげられ、他の一隅には亀を興味深そうに観察している。大きな積木で高層建築のテバートを構成している男児もあれば、木工で船を作っている者もいる。

子どもの興味を重んじるためにいろいろの興味が併行してとりあられ、しかもグループの大きさが小さいことが特長である。

こうした中で教師はアドヴァイザーとして全体をみてまわる。子どもが亀のうちを作ると言えは話し合いによって「土」が必要なことに気づかせる。汽船の煙突について言い合いが始まると写真や簡単なスライトを見せたり、ヒントを与える。行事など父兄を招待して見せることは全く稀である。建園に尽したワシントンの誕生日にみんなでケーキをたべる。ナフキンは皆でつくったのしむ。あくまで子ども本位である。ハスをつらねて全員が父兄同伴で遠足に出かけるようなことはあまりなく、附近の町の工場とかパン屋などへ気軽にしかけて社会科の見聞を広めている。日本においては米国のような困難な人種問題もなく、国家社会の構造も違うし市民教育ということとはあまりとりあげられていないが、将来の日本を荷う子どもたちの教育を考えるに当り、人間像の問題と関連して従来「社会」が充分再検討されることを願っている。

（東洋英和短期大学）

第十二回 幼稚園教育実際指導研究会

教育内容の研究——「社会」を中心として

主 催 お茶の水女子大学付属幼稚園

幼 児 教 育 研 究 会

協 賛 お茶の水女子大学

教 育 研 究 室・児 童 研 究 室
付 属 小 学 校・中 学 校・高 等 学 校

今年もまた本研究会を開くことになりましたが、毎年のご厚情を深く感謝申しあげます。

幼稚園教育要領の改訂もまじかとなり「社会」についての指導書もすでに編集中であります。本会としましては、他の五領域については昨年までに、応研究を終えたことになっていますが「社会」については、昨年、問題点を見きわめる程度に触れただけであります。それで、本年は、この分野に関係する諸問題を取り上げていっそうの探究を重ねたいと思ひます。

また、恒例により、本園の保育全般にわたる実際指導を公開して、皆様のご批評をえたいと願っております。

本年も、多数の皆様の御参会を心からお待ち申しあげています。

日 時 昭和二十八年六月七（金）八（土）九（日）の三日間

会 場 お茶の水女子大学講堂

講 師

お茶の水女子大学教授 波多野 完治
お茶の水女子大学教授 勝部 真長
お茶の水女子大学助教授 津 守 真

日 程 表

6月9日 (日)	6月8日 (土)	6月7日 (金)	
		受 付	9.00
実 際 指 導	実 際 指 導	開 会 の あいさつ	9.30
協 議 会		実 際 指 導	10.00
講 演			11.00
閉 会 の あいさつ		協 議 会	
	昼 食	昼 食	12.00
	協 議 会	講	13.00
	講 演	演	14.00
	全 体 質 疑	講 演	15.00
			16.00

実 際 指 導
会 員
会 費
申 込 場 所

幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者
三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）
東京都文京区大塚町三五 お茶の水女子大学付属幼稚園 幼児教育研究会

お茶の水女子大学教授 坂元彦太郎
お茶の水女子大学付属幼稚園職員一同

「社会」を中心とした指導の実際

東京女子大学附属幼稚園

お茶の水女子大学附属幼稚園

三才児

堀 合 文 子

幼稚園の中で、特殊な指導を考えなければならぬのは三歳児だ。そして将来の一番基礎がつけられるのもこの一年だ。もちろん、四歳五歳も基礎はつくれ続けるが、未発達という点においては三歳児がとくに考慮されるべきだと思う。

幼児教育における社会の領域においては、他の領域以上、時期や年齢を区切らず指導されているもので、その中は広く、他の領域と生活の中では錯綜している。大きく取り上げ

れば全生活であり、無関心であれば生活の一端においやられる。

三歳児一年間の生活は殆んどこの領域の生活で、将来の幼児の活動への起動力となる。

三歳児指導のむずかしさと思うとき、まず指導してきた一年間を反省してみよう。

目標は、

○ よろこんで幼稚園へ通園するように。

○ 友だちと元気によくあそぶように。

○ 基本的習慣、幼稚園生活をする上に必要な

習慣をみにつけるように。（これは一般に生活習慣として指摘されていること及び、園としての約束をまもるなども含める。）

以上の三つで、これは一年間通しての大きい目標であり、また学期別の目標であり、週別、日案の目標でもある。

指導

両親の加護から、踏出した一歩である幼稚園生活も、幼児の生活は「あそび」であるか

ら教育の場である幼稚園という環境も、幼児にとっては家庭と同じ「あそび」の生活が続けられなければならない。で、勿論目標もあそびの生活の中で、機会を捉えて指導され、

或る時は個人的に、或る時はグループで、或る時は大きいグループでと、機会ごとに指導した。

十五人の幼児数だったが、あることにおいては十五へん同じことをくりかえし指導した。

またある時は十五人十五色の指導をした。

幼児のあそびの生活に常流れているその流れは、時により、日により、月により、穏であり、激であるから、何月何日にはこの指導という予測もうらぎられ、幼児の毎日の生活状態の観察により、目標は実施された。

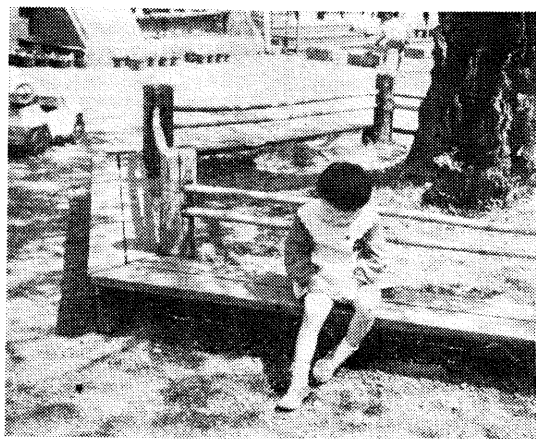
実際

入園当初は、

幼児数十五名の中男子（八名）の中に附添

とはなれにくいものがいたが、女子（七名）は活発なものが殆んどで、父兄の協力を得たせいか、比較的「あそび」にスムーズに入れ、二、三の幼児が仲間に入りにくく、教師が油断すると泣顔になってしまう程度で、比較的積極的な組であった。

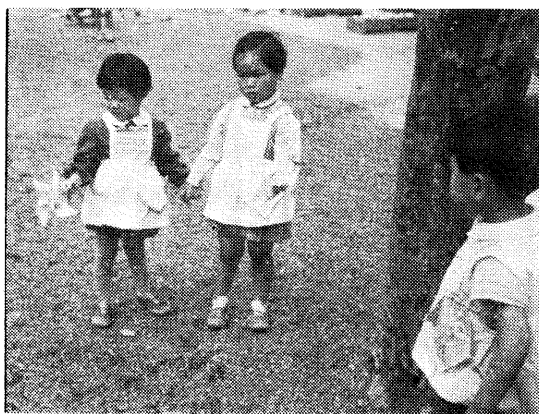
入園二日目、女子は「ままごと」を場にして、激しい口げんかが起ったのには、これが



あそべない子

三歳児かとまで私の頭を、私の計画をまどわした。

習慣においては、例年のとおり、あるものはできるし、あるものはできる時とできない時がある程度で、また幼稚園生活での習慣も順当な経過を示した。一学期の間は手洗所とお部屋の往復、手洗とかたづけ、下ばきの洗たくに口をくらししたこと、三歳児の思い出



そろそろお友だちができる

であり、教師のちょっとした不注意、きのくばりが原因となることも痛い反省であった。

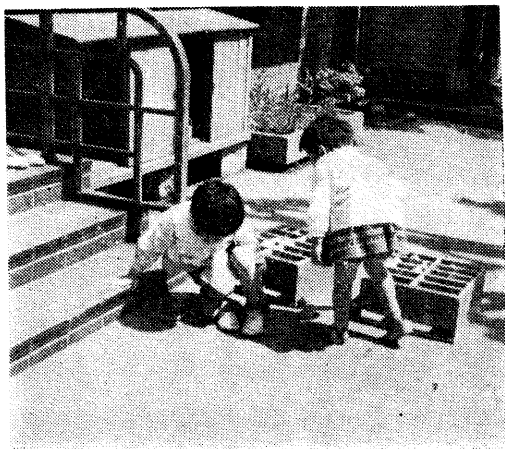
一年後の今日

身心共に成長した十五人を眺め、明るい笑顔で幼稚園生活を我もの顔に生活している人たちを見る時、私のお腹の底ではうれしく満足で親馬鹿に似た気持ちさえ沸く。

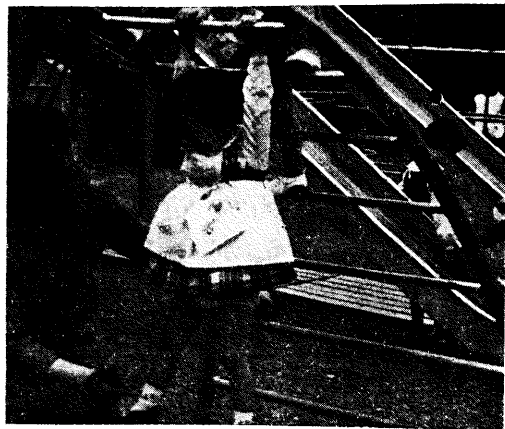


みんなあそんでいる

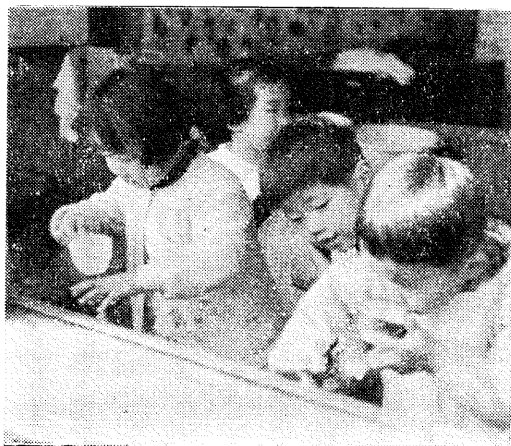
くつのはきかえ



先生も一しょ



うがい 手洗



○私が先だたなくとも自分たちでするというところが見えてきた。

○一応、ボツンとあそべないで立っている人はいなくなった。

○生活の習慣も決っていることはスムーズに生活の流れに入ってきた。

○三歳児としての基本的なことは大体可能とされたが、次第に次の年齢への移行として

内容的な深さ、よしにつけあしきにつけ違った面での成長がみられてきて、深く、こまかい面での指導も当然要求されてきた。これも一つの成長だろう。

○自分というものを赤裸裸に出してきて、個性がはっきりとつかめるようになってきた。このこともこれから活動する幼児の内容や能力に対して芽を出したと言えよう。

留意したことは
○家庭の環境なるべく近い環境にするように留意した。

○朝のむかえ方ということに特別留意。朝登園してきた時の教師のむかえ方で幼児の一日が支配されるといって過言でない。特に三歳児や入園当初の幼児には大切なことで、これがすべて一日の、またこれからの

幼稚園生活への基になると思うので特別に留意した

○私の態度に特別気をつけた。笑顔で明るくやさしくと、自分の年令に対して、幼児が親しみ、安定感を持つよう、年令の暗さ、威圧を与えないよう、若い教師のあの親しみを幼児に与えるように自分の行動やことばづかいに注意した。教師が若く美しく行動的なことは、とくに三歳児に対しては大切なことだと思った

○これは改めて取り上げることでもないが、幼児とよくあそぶ、体を動かし労力を惜まず教師が率先して行動した

例えば始めは手洗所へゆくのも自分から幼児になってゆく、片づけなども命令ではなく自分がやる。とくにはじめの中は何でも教師がやってあげる。母親が手をかけすぎると非難される場合があるが、そのようかけすぎる位世話をよくするようにした。このことは一年間に次第に、或いは、或る時にはその指導は変化するが、手をかけすぎる位世話をよくしてあげることが、精神方面にもまたかえって幼児の生活指導の指導方法としてよき効果をあげることができる

私は自分なりの信念として持っていた

○これは自分自身の気持のことだが、指導においてあせることをとくに自重した

三歳児でもある程度、やることを表現することはやればできるが、それこそ毎日毎日自由ののびのびとあそばせた。何かやらせなければと思う気持をおさえてきた。この年令ですべきこと、この年令相応の完全なる発達をするにはこの生活が大切なのだと常に考えてきた

○健康につながるいろいろなことは特に配慮し、おかあさま方との話合いで協力してもらった

○幼児の日々の成長変化に気をつけ新しい指導のハロメーターにした

生活状態の変化成長によって指導の指針にし、机上の計画を行なうのでなく状態を観察しながら計画をすすめていくようにした

反省

入園児を迎えた時はあれもこれもと理想像をえがいていたが、毎日毎日過すうちに、今考えると果されていないことが大きな反省

だ。三歳児の指導はいかようにもなる。教師が楽に過せは楽に過せる。しかし一番大事であり、むずかしい。自分の頭には何かあの三歳児の顔と、三歳児の理想の世界とが浮かぶが、その世界へいれるのはむずかしい

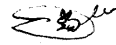
一年後、成長したみんなの顔をみる時、将来への基盤が止しきできたか、一人ひとりの将来の力が芽を出したかしらと不安になる

幼児教育は何も表に現れる教育の結果はない。それだけにこの三歳児の時の生活が大切であり、むずかしいことは何度くりかえしてもきえない。幼児だけでも年令がすすめは成長は、する。しかしそれでは教育の必要が無かった。現代の社会状態で、幼児も昔よりこうになった。と思われるか、それはある面だけであることと、三歳児は三歳児としての完全な成長をしていなければならなく、三歳児でも三歳児のことができなくとびこした成長をするような指導をしないようもう一度ここで反省したい。今後、基盤となる三歳児の指導は特に研究したいものだ

**

**

**



関 治 子

である。

「社会」の中でも、その内容はいろいろで、書物にも書かれたりしているが、私は、あそびの発展——ひとりあそびからグループあそびへの移行の状態——の一年間の記録を中心に筆を進めていきたいと思います。

四 月

幼児にとって始めての集団生活を楽しく出発させ、安定感を持たせたいと、一番苦労をし、また張り合いもある時期である。

それぞれが、個性をもっている。皆、うれ

昨年度、受け持った三才児の生活を「社会」の観点から、実際に即して記してみることにする。

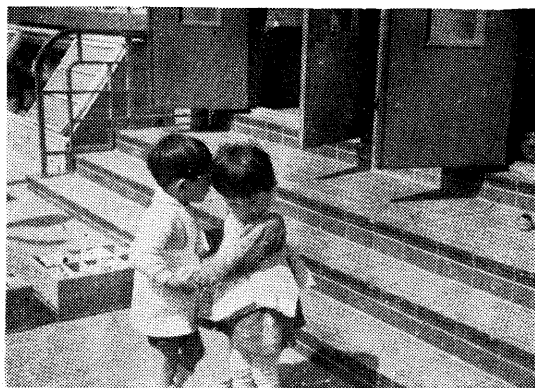
幼児の生活は、年令が低いほど、未分化な状態にあるので、とくに三才児においては、領域別に考えるのは困難に思われる。しかし幼児の生活と指導法を、複雑ながらも美しい織物にでも例えるならば、その横糸・縦糸を分析して考えてみることはできる。

「社会」の場合は、とくに幼児の生活の中に占める割合が多い。三才児のこの組の指導目標を当初、次のように考えた。

1. ひとりひとりが十分にあそび、生活習慣の基本を体得できる。
2. 友だちともあそび、集団生活の基礎を養う。

実際の指導も、この点に力を入れてきたの

		A 夫		B 子	
一日目	祖母から離れない			家人から離れない	
二日目	母と一日一しょ			年長組女兒と登園、時折大泣き	
三日目	母と一日一しょ母から少し離れ笑顔がでる			母と来て一泣き、母を離れて先生に一日中ついていく	
四日目	母と一日一しょ母と一しょならあそぶ、泣かない、皆の所はいかない			朝一泣き、離れる、帰り一泣き	
五日目	母と一しょだと遊具でもあそぶ、次週は離すよう母と約束する			朝、一泣き、元氣にあそぶ、帰り、皆と一しょにはならない	
二週目	祖母ときて大泣き、しかし離れさせる、先生にくつつく			朝ちよつと不機嫌だが泣かない	
	父とくる一泣き			泣かないでくる、先生のまわりであそぶ、皆とは殆ど交渉なし	
	父とくる一泣き、先生のまわりであそぶ			何の抵抗もなく入ってくる、皆と一しょに並んでかえらない	
三週目	元氣一ぱいあそび、ややもするとかきまわす型			朝は調子よい、生活の区切りがつかない	



しように幼稚園生活が始った。A夫とB子が家の人から離れない。その個々の性格に適した方法をとりたいと考える。

前員の表は家庭の側と、教師とよく話し合って実行してみた例である。

さて、他の幼児のあそびはどうであろうか。大体において、女児の方が、ままごとを媒介として、ずっとあそびに入っていく。幼稚園のままごと道具に魅力があるのか、かな

り興味深そうに、時間も長くあそぶ。五人六人と

人数もふえて一時間位つづくこ

ともある。相互に会話をして関

連をもつてとい

うところまでい

ってはいないが、

積極性の強い幼

児の発言が自己

中心的で、しつ

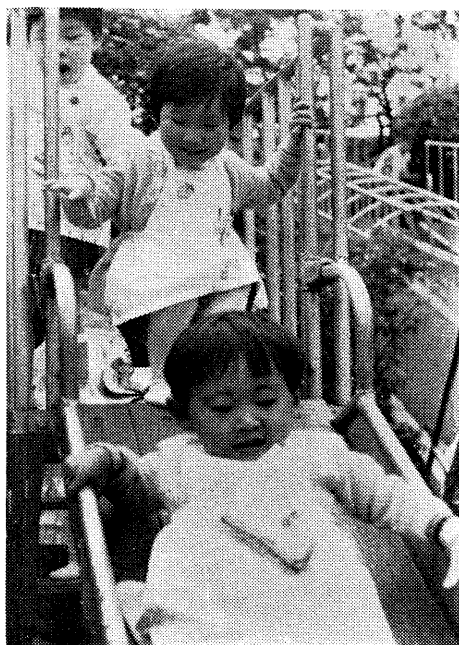
こいので、時折、ごたつく。

積木・組木など教師の方から積極的に出してみる。男児の方が主に寄ってくる。ただ、

つみ上げたり、ひっくり返るのがおもしろかったりでやや衝動的、目的意識はみられない。

天気の良い日は、庭で砂場やブランコなどであそぶ。まだ遊具を使うものには手を出さない幼児もいるが、気分は明るくなる。こうした折に、靴のはきかえや、並んで歩くこと

などを実際の折にふれて指導する。



おもしろいおすべり

三週目になると、朝、家の人から離れない

幼児がいなくなったので、何となく安定感が出てきた。自分が集団生活になじんできたので、はみ出てしまう人を気にして掴まえて、

何とかしようとす可愛い正義漢もあらわれる。

自発的に遊具をひろげ出したり、砂場・す

べり台など、全身を十分に動かすものは、ひとりひとりが精一ぱいあそんでいる。

五月

かけおりますよ



並んでいきましょう

列になって歩く、お手洗いにいくことなどの生活習慣がだんだんに身についてくる。

「かごめ」に十四人も、次々に加わってきて、多ぜいであそぶ。もちろん、教師も入っている。しかし、持続時間は短い。

ままごと道具をもって電車ごっこに入ったり、行動範囲が広がってくる。電話を使い始めたので、私も積極的に話す。すぐ応酬する幼児もいる。この辺は、教師対幼児の活動が随分多い。

五月になって、ふとしたことから、泣くこ

とを覚えたC子が、時々、大泣きをする。

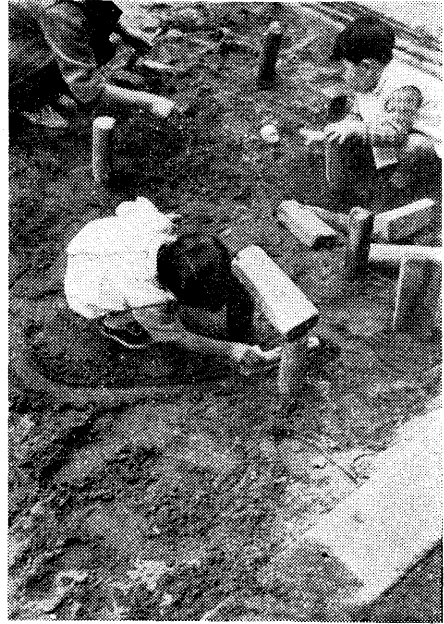
自動車の玩具が魅力的で仕方がない。ほしくて仕方がないようすの五人、そしてまた一人、皆我慢している表情。やはり数も余り豊かなのがよいとはいえない。この機会に、代るがわる使うことを指導する。しかし、この頃から、自己主張も始まり、けんかがみられるようになってきた。ピクニックごっこという目的のあるあそびが二、三人のグループではじまった。いつの間にか、男児が、かたま

てあそぶ傾向がでてきて、その行動半径が広がってきた。

学内の広いグラウンドまで散歩にいく。斜面を、フルスピードでかけおいたり、本当に楽しそう。解放された満足な表情を見逃せない。こうした時、友だちと手をつないで、歩くことも指導し易い。

砂場でも、互いに反対を向いてあそんでいた場合でも、教師のちょっとした話しかけで、幼児同志を結びつけることができる。今度は友だち同志であそびつづけることができてくる。

これでつきょうにしようか



あら早くつくりましょうよ

六 月

ひとりひとりが十分にあそべるようになってきて、だんだんに、友だちという意識をもってほしいところである。

友だち関係ができたためか、けんかがふえている。その解決に、三、四人で口を揃えて「どうしたの?」と、何とかしようという相互関係と協力がみられてきた。また、男児の方に、三人位のグループ意識がみられはじめた。そして、このグループが、組木の

ヒストルをもって、女児のままごとグループと話をしは、交流してあそぶことが起り始めた。

七 月

目的をもってあそび出すことがふえてきた。積木でも、いかだづくり、お城づくりなどと考えてつくろ。しかし、同一目的で何人かが協力するという事は殆どない。積木あそびは共通で同時にやっているが、ばらばらに目的を達しているところ、それでも友

だちと一しょにやっているという意識を持っている。

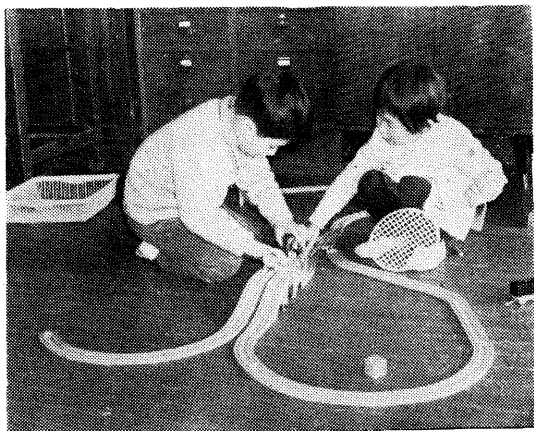
九 月

夏休みのあと、玩具のとり合い、すぐに手が出る。女児の間にも、けんか、そして手が出る。口でも自我をおし通す。

砂場・ままごと・ブランコ・ジャングル・汽車ごっこなどに三、四人ずつグループとなつて、じっくりとよくあそぶようになった。

「月ロケットごっこ」は、八人も一しょ

これつなげたら？



で、単純だが、ストーリーのあるあそび。長くつづくのは二、三人であとは入れかわる。「花一もんめ」も八人位、多ぜいであそぶ。年長組も入ってきて一しょにあそぶ。

十月

玩具を二種類併用したり、使い方を变化させたりして工夫がみられ、あそびが進歩す

る。

そして、友だち間で、会話を交しながら、グループであそぶことが多くなる。十分、子どもたちだけで、食堂ごっこなど規模を大きくしてあそび、後片づけも、それほどたいへんでなく、自分たちでやる。

男六人のグループは「動物のお家ごっこ」。指人形で、同一テーマで、かなり長時間まとまってあそび、グループ意識が大分出てきた。

こうなると、グループに入れないB子は、しきりと、友だちをひっかきにく。恐らくいじわるというよりも、関心を示すようにこういう行動に出るのであろう。教師と一しょに、B子もあそびに入れてもらおうよう、やってみる。D夫も、他の友だちにおかまいなく一人で、思いのままあそんでいることがある。E夫は教師の傍にばかりいて、友だちの中には長時間いられない。こういう二、三人がいるのだが、運動会で、多ぜいの幼稚園の友だちと一しょに行動することを体得する。

十一月

あそびの種類がぐんとふえてきた。

自動車ごっこ 五人、戦争ごっこ 三人

(バトミントン)

学校ごっこ かくれんぼ

病院ごっこ 縄電車ごっこ 三人

犬ごっこ 十人

およめさんごっこ 三人(長時間)

マイクごっこ

グループの人数がふえたこと、時間が長くつづくようになったことを感じる。あそびが發展してちがうあそびに入っていることがよくある。

十二月

おすもうごっこ

余り長つづきせず

マイクごっこ

うたをうたう、組木のマイク

注射ごっこ

組木の注射で人形に

車庫づくり

協力して積木で

食堂ごっこ

ままごと道具で

舟ごっこ

積木の舟、くじらとり

警察ごっこ

お家ごっこ

引越して二階をつくる
女児全員、時々言い争い



二 月

のりものごっこ、心配性のE夫も、現実と夢の世界旅行で、イギリスだスイスだといながら、森におさんほにいきましようなどと相当長時間あそぶ。私も、この頃は、子どもの方に入れて貰ってあそんでいる。

動物ごっこも、火事、消防、などとストリーがあって、これを擬人化して、よいあそびでおもしろい。時には、男女がばつとわかれて二グループ位で、じっくりあそぶこともある。連続して筋を追ってあそび出す。「また明日、このつづきしましょうね。」そしてちゃんと覚えていてやっている。

三 月

一人だけ、グループごこのあそびに入れない。

こうして、一年間のあそびの足跡を顧みたら、友だちの中に入っていくにくかった四人のタイプを考えてみよう。

1. E夫 心配性で理論派(批判的になる)
2. F夫 いばり屋(知ってるものとすぐに口出す)
3. B子 反抗期的(反対ばかりいう)
4. D子 納得型(納得しなければ何もしない)

その他、十人十色であるが、以上書きつづってきたことは、集団生活の場で発達し、育成された記録である。この中には、幼児自らが、自然になるべくしてなった姿もあらうが、幼児と一しょに一年間過した教師としての私が、ある時は意識して、ある時は無意識のうち、幼児の生活のあり方を考えての言行があったことも否めないつもりである。

羅列しただけのような味気なさも感じられるが「社会」の指導は、とりわけ、実際を通してなされねばならない。しかし、現場にいる者として、この実際の上に、理論づけを吸収していききたいものだと考えている。

一 月

羽根つき、ピアノ弾きが加わる。並んで順番をまわすことが入ってくる。B子少しづつ仲間入り、E夫は、友だちの中に入りきれず、心配性。
本屋さんごっこ、犬ごっこが大流行。小さい本をつくって絵をかくと、組木を鉛筆にして学校ごっこにもなる。男女混合でかなりの人数であそぶ。

四才児

村井 トミ

昨年受け持った幼児について、「社会」の立場から書くのであるが、「社会」ということを、どの程度に考えるか、深く考えれば考えるほどむづかしく、他の保育内容よりたくさん問題を含んでいるように思われる。幼稚園での「社会」に関するものは幼児の生活全体に流れ、ここからこままでが「社会」といって切り離せないのである。

そこで、ここでは、ごく平凡に、幼稚園での、四才児としての、個人的及び社会的な生活習慣、生活態度の点にしばって、ふり返ってみよう。

ちやうど今から一年前のこの頃、私は、既に一年間 楽しく三才児の生活をしてきた十

五名の幼児と共に、新入園児二〇名を迎えた。あわせて三十五名、男女の数は、ほぼ同数であった。

例外なく、そこには、いろいろの幼児の姿があった。ひよこのように親鳥の羽の下を離れぬ子、おどおどしている子、あそびに入らぬ子、わけもなく、いたずらや、いじわるをする子、べたべたと先生につきまとう子、口から生れたかと思うほど、おしゃべりな子、一時も落着いていられない子など……

幸なことに、親の方が、むしろ子どもに離れにくいという難問も、入園当日の話を、保護者がよく理解してくれてか、案外スムーズにいった。

もう一つは新旧の幼児関係である。旧園児が優越感をもったり、新入児が劣等感をもったり、または反対に教師が新入の幼児に手いっぱいの為に、旧園児が何となく淋しげに、ぼんやりとしてしまうというこのないよう、に気をくばった。旧園児には、私の手つだいをよくしてもらい、勝手なれぬ新入の友だちとあそんだり、手洗へ連れていってもらった。新入へだてなくということは、保護者にも、おおいに関係があると思ひ、三月中



入園当時　こぶがたくさんついて先生も重いこと重いこと

に前もって話をし、協力してもらうことを依頼した。

新入児の方が人数が多いということも、この場合にはよかつたかもしれない。

(一)

新入児をかかえては、先ず幼稚園になれることである。個人個人の家庭から集団の中へ

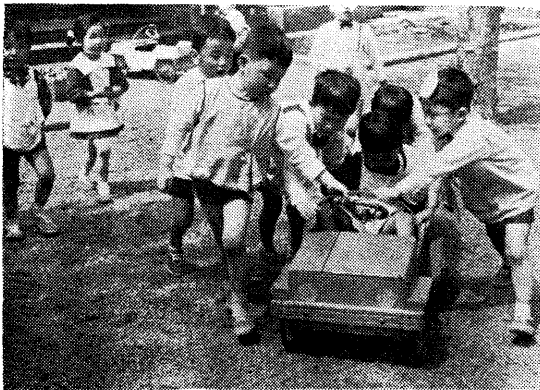
はじめて入るのであるから、子どもにしてもこれはさぞたいへんなことだろうと、半ば同情もした。それにしても、いかに幼稚園が楽しい所であるかを知らせるという一仕事があり、こちらも懸命であった。そして次のような、一学期に私のしたいこと、「ねらい」と言うよりも、「願い」というようなことを、自分にも言いかけせ、保護者にも話したことがあった。

- ・幼稚園になれば、幼稚園を楽しい所だということを知る
- ・幼稚園へ来て、いろいろのことをして、あそべるようになる
- ・次第に友だちと一しょにすることが楽しくなる
- ・旧園児は新園児を、やさしく教えてあげたり、仲よくしてあげる
- ・自分でできる程度のことは、なるべく一人でする
- ・みんなで決めた約束は守ろうとする
- ・思ったことを、素直に言える

幼稚園の生活に、よろこびを持たせる為にも、いろいろの遊びを知らせる為にも、友だ

ちと一しょということにも、思ったことを素直に言える為にも、先生としての大きな役目である雰囲気の問題がある。教師自身の明るさ、ついつりこまれるような楽しげな生き生きとした雰囲気は、子どもの心にも響かずにはないだろう。いつもそうであるが、特に一学期は、子どもの上に立っての指導でなく、一しょに、充分にあそんであげる、この辺に先ず第一の秘訣があるのでないかと思う。これは口で言えば簡単であるが、実際には、なかなか難しいことである。外へ一歩も出ない子もある。あそべない子の好きそうなあそびを早く見つけ出し、それをきっかけとして発展させていくのも、一方法であらうし、一工夫のいるところである。

こうしていろいろの遊びを経験していく中でよく子どもの状態を観察し、友だちづくりに精を出さなくてはならない。もちろん、教師の工夫や、機智、ユーモアなども当然必要となってくる。この頃の記録をたぐって見ると、四、五月の友達関係でおもしろいことに気づく。やっと教師の袖を離れて、うまく一日中遊んでいる、と、そうっと大切に見守っていると、それは一日だけであったり、二、



一台しかない自動車　かわり番にのりましょ　はい発車

三日で終ったりしてがっかりさせられる。しかしまた他の友だちと同様なことを繰り返している。昔から、「猫の眼のように変る」ということばがあるが、全くこのことである。

或る時は一つの遊びがきっかけとなって成功し（自動車とか、まりつき、虫さがしなど）或る時は家と同方向であったり同じ電車であったり、また或る時は偶然隣に座ったかなど、ちょっとしたきっかけでうまうまいく

時もある。この時の仲よしが、ずっと小学校、中学校まで続くこともあるし、一年の中でも、何度となく変わるものもある。三人の場合は、一日の中でも必ずその中の誰かが、のけ者にされ、そののけ者にされる子も決まった子でないというのも、おもしろいことである。

このようにして次第に、先生にくっついての一人あそびから、二人あそび、四、五人と次第にグループ内の人数が増えていく。そして一学期末頃では小さいグループが、あちらこちらに見られてきた。おもしろいことに一学期では、男児も、ままことにたくさん参加していることで、時には男児だけでしている光景のえられるのも、この頃特有のものである。

みんなで決めた約束を守るとい点では、「玩具の独占をしない」、「友だちと仲よくする」、「順番が待てる」、「物を大切に使う」、「あそんだ後や仕事のあとかたづけをする」。この程度の事を毎日根気よく、一つ一つ具体的に、個人的に、または全体的に指導してきた。もちろんはじめは、手を洗うにも並ぶことも、順番を待つこともできないし、小さい

な事に泣いたり、泣かせたりであったが、日を追って、一步一步前進してきた。

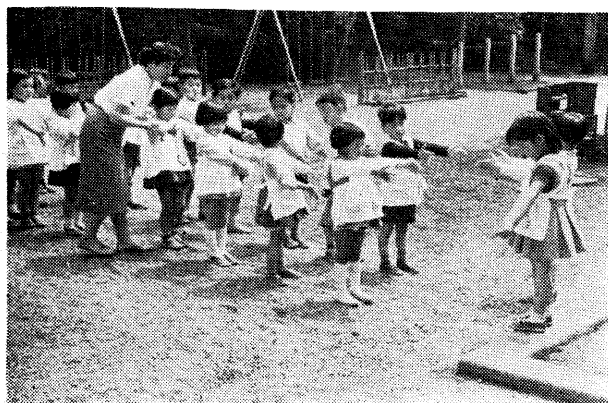
病気で長休みした幼児が、入園当時のふり出しに戻ってやり直しのようなことはあったし、いたずら坊やや、くっつき虫も何人もいたし、完全にはまだまだ仲間に入れないと言う子もいるが、一学期の生活で、皆幼稚園をたのしみに過したようであった。

(Ⅱ)

やっとなれたところで長い夏休み、一学期の苦心も水の泡かと思いつつ迎えた二学期だったが、案外好調にすべり出し、特殊な子ども次第に普通になってき



6・7人のグループでこんなにお山ができました



た。ただ、はじめの中は全体に目立って落ちつきを感じた。約束したり、注意したりすること、すぐ傍から消えていく感があった。「ぬかに釘」のことわざを思い出したりした。そこで二期の私の「願い」も次のようなことになった。

・友だちと仲よくあそぶ

・人の話を心からよく聞けるようになる
・何でも一生懸命やろうとする

みんなで決めた約束を守ることなど、その他一学期の経験のつみ重なりは、はぶくことにして、私はこの三つを二期の主眼として生活しようと試みた。

男の子たちは組に六つ位しかないバトミントンの獲得が英雄のようであり、お弁当の時も、そつとどこかへかくしたり、ズボンの下にしのべたりしているし、女の子は目立って口げんかが多くなった。原因は玩具を分けてくれないこと、なりた役にくれないことがトップであった。一見困ったことだと思つたがよく考えてみると、これも自己の主張がはつきりと言えるようになった一つの進歩であり、発展の経路にちがいないと思うと嬉しくもあった。一学期には無事平穏であった、ままことにしても、一つの強力な権力の下に言うより、まだ一人ひとりが、自己の主張を口をとがらせて言えるような段階に到っていないのであろう。そこで思いきつてゴザやままごと道具をふんばつて用意した。これはよい結果だった。

また、実によくおしゃべりをするようになった。

った。つきるところを知らずである。これも、うれしい悲鳴であった。

二期の末には同じまごとでも幾軒にも分れてそれぞれ工夫して世帯をひろげるようになってきた。男の子たちはリレーに凝りだした。あきらかに競争的なあそびを好むあらわれであらう。明けても暮れても、バトンを手にして、よくも飽きないと感心する位だ。

「花いちもんめ」「あぶくたつた」「たけのこ一本おくれ」「ひっぱりっこ」などもこの頃、男女を問わずに、「入れてー」と飛んでくる好きなあそびであり、相当の人数でよくあそんでいた。

(Ⅲ)

お正月を過ぎての三期の「願い」は、次のようなことにした。

・誰でも仲よくあそぶ
・誰にでもあそびを工夫する
・いろいろなことを工夫する

・何でも積極的にしようとする

三学期末よりのリレーは相変らず夢中であり、人数も多くなった。警察ごっこのようなことも、まりぶつけなどのようなことも、時には男の子全体位でやっていることも見られた。実によく遊ぶようになってきた。かえつ



て女の子の方が、まだ友だちをより好みの傾向が多に残っているようだ。

何でも工夫するということは、製作や音楽リズムを創造的にすることばかりでなく、生活の中でぶつかる事ごとに対処するにも、適切な判断や理解のできない子であって困るという考えである。もちろんあそびの

中にも工夫が大いに必要であろう。

積極的にということは、経験して自信のあることはよいが、未経験のことは臆病で一歩も前進しないという子が、まだまだいるということによってであった。

気の弱い子どもには何ととってもどこかを認めて自信をつけてあげることが一番近道の

ようである。或る一つの自信から次の自信を生むことになる。先生の手伝をしたり、友だちの世話をするお当番も三学期から本格的にやり出した。大好きなお当番、これも自信をつける一助になるかも知れない。

大きな眼で見て、この頃はさすがに、自分のことは、この年令なりに処理しようとするし、かたづけもよく協力してやってくれる。

成長したなと思う。三学期も終る頃には、年長組の受けもつ「ひなまつり」や、一人ひとり証書をもらう卒業式などを見て、もうすぐ幼稚園の年長組になるのだという自覚と希望が十分出てきたようで、張り切っている様子が見えた。

四月には皆、顔を輝かせて、年長組の部屋へやって来ることだろう。

これからも玩具の取りっこや、けんかも、まだまだ続いて起ることであろう。また、大きくくなったあと、喜びに顔を輝かすこともたくさんあるだろう。

先生も子どもと共に一つ成長して、張り切って踏み出さなければ、いや、踏み出そうと新学期を前にして、私は今、胸いっぱい空気を吸いこんだ。



守 永 英 子

四才児とともに過したこの一年間に「社会」の領域をどのように扱ってきたであろうか。元来、幼児の生活は未分化なもので、六領域も、互に独立分化したものではないといわれるが、殊に「社会」については、その感じがつよく、むしろ生活全体に網の目のように入りこみ、からんでいるように思える。この一年をふりかえっても、「社会」に関して何をしたかをとりたてていうことはむずかしい。しかし、この一年間に最も心をくだいたのは「社会」に関したことがらであったかもしれない。どうしたら、幼稚園の生活に、はやくなれるだろうか。お友だちと仲よく遊べるようになってきただろうか。自分を出しきって遊んでいるだろうか。いろいろなことに興味をもって、いきいきと活動しているだろうか。年令相応に、集団生活のルールが身に

ついてきているだろうか。今もなおつきない問題の中にあつて、どのように、この一年を過してきたかをふりかえつてみる。

◎ 入 園 当 初

入園当初の子どものようすは全くさまざまである。朝、登園するとすぐにお庭にとびだす元気な子ども。お友だちに働きかけて遊ぼうとする社交的な子ども。誘われればついていくおとなしい子ども。ひとりで絵本をみたり、汽車を動かしたりすることも。何もせずにじっとしている子ども。中には附添から離れにくい子どももいる。早速、胸のうちで大体の鳥瞰図を作らなければならない。家で遊びなれているようなもの、ひとりでも遊べるようなものを中心してえらんだ玩具を、遊びかけのように用意して子どもたちの登園を待つ。次々に現われる子どもたちには「おはよう」と声をかけながら、この子どもは、このまますぐに遊びにはいれるだろうか、どうやって入れようかと考える。遊具に誘われてすぐに遊びにはいる子どももある。ままごとの好きそうな女兒には、「お人形さんや熊さんがおなかですいてたんですつて。朝

ごはんあげてくださる？」とままごとコーナーに誘つてみる。遊びにはいるきっかけをつかめない男児は、いっしょに汽車を走らせた、積木でトンネルを作りながら、「あら、ここどうしようかしら？」などと相談をもちかけると、「こうするんだよ。簡単だよ」と自信をみせはじめ。附添から離れにくい子どもや何もしない子どもは、絵本をよんであげたり、卓上積木をつんで「もっと高くつめるかしら」と手伝つてもらったり、それがガラガラとくずれた時にいっしょに緊張がほぐれたりする。新しい環境を一通り知ること必要であるから大体全員が登園したら、室内で遊んでいる子どもを誘つてお庭に出る。お庭をぐるっと一まわりしてみるが、まだ不安気な子どもたちに一番人気のあるのは、お山から草をつんできてモルモットやにわとりにたべさせること。くり返しくり返し帰り際まで続ける子どももある。この簡単なくり返しのあそびも、「いっしょに摘んでいらっしやい」とお友だちと手をつながせると、それがきっかけで仲よしになったものもあった。
幼稚園の中で遊ぶこと、これだけはしっかりと約束したが、この制約の中では、子どもた



ちは、幼稚園とは自由に楽しく遊ぶところだ
ということが次第に分ってきたようだった。

◎ 自由遊びの中で

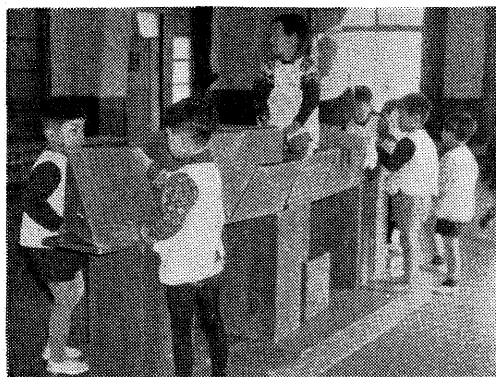
子どもたちが新しい環境の中で安心して羽
をのばすようになってくると、危険な場面も
みられるようになってくる。危険な場所での
遊び、遊具の危険な使い方は注意しなければ

ならないが、のびし始めた羽を縮めてしまわ
ないように、その仕方に気を使う。軽い注意を
軽く受け入れてくれる場合もあるし、間接的
な誘導で遊びの方向を転換させて、やっとで
きかかった親和関係を傷つけずにその場を脱
することもある。

まだ充分安定感がなく消極的な子どもは、
自由な遊びよりも紙芝居などを喜ぶ。入園当
初から、受容遊び（紙芝居、テレビなど）を
主として、学級全体が集ってする活動もと
り入れてきたが、この時期には、集団行動より
も自由遊びの中で、自発的に、自分を打ち込
んで遊べるようになることをねらった。消極
的な子どもをしむけるためには、教師は積極
的に話しかけたり、いっしょになって遊んだ
り、お友だちに誘いかけてもらったりした。
彼らがそろそろと自分を出しかけた時には、
その遊びが妨げられることがないように守っ
てあげることも必要だった。

少しなれてくると、子ども同志の接触を刺
激するような遊具、遊び、助言が必要にな
る。「かごめかごめ」「おにごっこ」などの
集団あそびやままごと、乗物玩具、縄電車な
どが効果的に使われる。「どなたかお乗りの

お客様はありませんか」と誘ったり、教師も
お客様になって、ままごとの家をたずねたり
する。自分からも、「入れて」「のせて」など
が言えるように「きつと入れてくれるわ」と励
ましながら、働きかけが成功するように結果
を見守ってあげたり、ことばをそえてあげた
りした。砂場なども、「大きなお山をつくりま
しょうか。手伝ってちょうだい」などと誘い
かけて、ひとりではとてもできないような大
きな山をつくったり、川や橋やダムに発展さ
せたりする。お友だちといっしょにするおも
しろさを経験することが協力の気持ちを芽ばえ
させる助けとなることを願いながら。こうし
て、教師の媒介や遊具、遊びを手がかりにし
て、子ども同志の触れあいが多くなり、次第
にいっしょに遊べるようになるが、交渉の技
術の未熟さからトラブルも多い。「Aちゃん
がぶつんだよ」というBの訴えに、「どうし
たの」とAにきくと、「僕のシャベルをとっ
た」という。Bの意外そうな顔を見ると、ど
うもAの使いかけのシャベルを、Bがそれと
知らずに使ったらしい。「向うの箱にまだあ
るわ」とBに取りに行かせて、「Bちゃん間
違っちゃったのね。怒らないで『それ僕の』



つていえばよかったわね」とAにいうと、Aも少し落ちついてきて頷く。戻ってきたBに「『これAちゃんの?』」ってきいてみればよかったわね」というと、Bもシャベルを手に入れて気持がおさまり素直に受け入れる。また、積木の場面では、せっかく作った舟をこわされたといって怒っているC、言われて困っているD。Dが誤ってくずしたことをDに説明し、Dに謝ることをすすめる。Dといっしょにこわれたところをなおしてやり「Dち

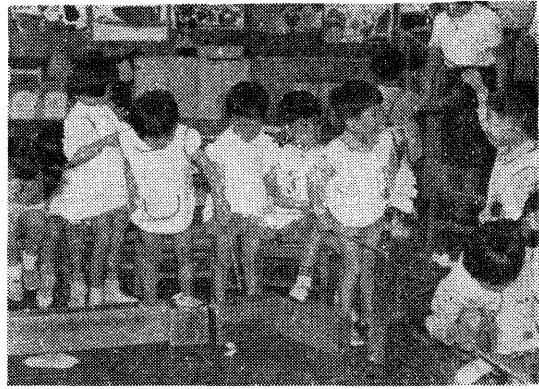
ゃんがなおしてください」から『ありがとう』っていいましようね」と促す。このような時、Dがすぐに「ごめん」と言えれば、Dもそんなに怒らなかつたのではなからうか。このようなコミュニケーションの不足から起るトラブルも多かったが、子どもたちの成長は、「これ君の?」「うん、でも貸してあげる」「こわしていやだな」「ごめんごめん」という形に次第に変っていった。子どもたちの成長ぶりは、真っ直な階段を登るようなわけにはいかなかったが、それでもこの一年の終り頃には、数人から、或る時は十数人ものグループを作って、仲よく遊べるようになった。砂場のダム工事や、積木の滑り台や城塞づくり、ままごと、リレーやラケットでボールを打ち合う簡単なゲームなど。「こうしようよ」「うん、そうだね」と子どもたちの関係もかなりスムーズに、遊びも創意工夫を生かして進展する和やかな一日に、「今日は開店休業ね」と微笑ましく思う日が多くなった。電蓄を使うことを覚えた女児が二、三人「びーぶるびーぶる風がふく……」と大すきなレコードをかけながら、まわりに集った数人の子どもにその絵本をみせてあげている様子、

夢中で見ている子ども……本当にかわいいなと思う。一、二度教えてあげた電蓄のあとしまつもきちんとしてくれるようになったのは驚いたが、こうして自分でできることが多くなることは、子どもたちが自由にふるまえる領域が広がることだとしみじみ思った。

◎ 絵画製作の中で

秋の運動会もすぎた二、三日後、私は黒板に紅葉の葉を一枚かいた。「先生、何してるの?」「この間の運動会のおゆうぎに紅葉がでてきたでしょ」「ああ運動会の絵? 私もかいていい?」「だんだんと人数がふえて%ほどがわかるがわる参加。」「りすもあつたわよ」「ことりも」「きのこも」「色とりどりのチョークで黒板は、秋のお山のお友だち」で一ぱいになった。

また、お友だちと二人で一枚の画用紙に運動会の絵をかかせてみた。「いっしょにかかない」と誘って二人組をつくること、何しでるとこかく?と相談すること、そして、かいている間の話合いなどがスムーズに行なわれて、子どもたちの成長が感じられた。ふだんあまり協調的でないYも、教師の助言で相



手をつめつけると、あとは二人で嬉しそうに、「玉入れ」の絵をかいていた。

秋頃から、子どもたちは空箱を使って製作することに興味をもちはじめ、雨の日や、外あそびにあきると、いろいろなものを作った。いつも変ったものをつくるM子が洋風の家をつくってきて、「先生、あとどうしようか」という。子どもたちに「どうしようか」と言われる時、私はたいてい「そうね、どう

したらいいかしら」と受けることにしている。そのあと子どもが自分で考えて意見を出してくれることが多いから。しかし今日は、M子も同じことばをくり返すばかり。よい考えが浮かばないらしい。そばに独立独歩型のYがボツンと一人でM子と私をみている。「Yちゃん、どうしたらいいと思う？」Yは製作が好きなので興味をみせ、結局、M子が屋上にフールをつくり、フールに上る階段の上にYが望遠鏡を作って、デラックスな家ができた。TとNは二人で電車を作り、Nが家に持って帰るというので「Tちゃんと相談してね」というと、「僕ジャンケンで勝ったの」とすましていた。この程度の問題は私の手待つまでもなく解決できるようになっていたのである。

◎ ゲームやごっこあそびの中で

運動会の前後、五才児に刺激されてリレーがさかんになった。といっても、まだグループの勝敗を競うのではなく、二列に並んで自分と対応した相手との個人競争である。それでも自分たちなりのルールがあるらしく、それを破るものは批難された。集団生活には、

きまりをまもることが必要で、こうしたルールのある遊びは、その態度を育てるよい機会となる。いすとりや、宝さがし、じゃんけん、汽車などをして、ルールを守って遊ぶ経験をもたせた。普段使っている遊具からゲームを考えてもらったところ、ラケットにボールをのせて大積木をまわってくるのがいいということになった。しかしボールはころがるので、むずかしすぎるのが分り、布の玉がいいと修正案が出された。まだ団体競技のおもしろさよりも、個人的な勝敗に関心が強いが、ルールに従って遊ぶことのおもしろさは次第に分ってきたようであった。

自由あそびの中にもごっこ遊びはみられるが、学級全体で参加するごっこ遊びには、かなりきまりをまもることが要求される。一学期の終り頃、魚つりをして遊んだ時には、積木の池の囲いがこわれても、かまわず中にはいつて夢中で魚をつる子どもも大分あったが、十二月末の玩具やさんごっこでは、工夫して作ったたくさんさんの玩具を、園全体の子どもたちに立派に売りさばくところまで成長したものであった。

◎ 当 番

自分のことだけで精一ぱいだった子どもたちも、生活になれてくると、教師の仕事を手伝いたがるようになった。おべんとうの時のおぼんくばりなど希望者が殺到して取り合うほどなので、そういう気持を満たすと同時に、ひとりひとりにリーダーシップをとる機会を与えたり、自律的な気持を育てるために当番をおくことにした。当番の仕事は、主に遊びや仕事のあとかたづけ、食事前の用意とやかんの後始末、並ぶ時の先頭にもなり、組全体への連絡係や、その他必要に応じて教師の助手になったり代りになったりする。お当番のしるしのリボンはみんな一様に嬉しいらしいが、意識の点では個人差が大きい。先頭に並ぶ特権が主となる子どももあるし、当番の責任を全うしようという意気込の子どももあるが、概して、何かおとなになったような喜びで仕事を手伝う。当番であるのに遊具をかたづけなかつたり、けんかをしたりする子どもに対するみんなの批判は手きびしく、「お当番さんなのに……」といわれて自覚を促される。

× — × — ×

思いつくままにあげてみたが、他の領域の中で、また行事的な活動の中で養われるものも多い。あげればきりがなく、まとまりがつけにくい。他の領域のように、とくに、この遊びで、この仕事でというようなものでなく、生活のどの場面でも、あらゆる機会を捉えて育て養わなければならないからであらう。

触れ残した重要なことの中に、個人差の問題がある。組全体をみると順調な成長を示しているても、個々の子どもの問題に立ちかえった時、問題を藏したままで幼稚園期を過していく子どももある。成長と共に消える問題か否かも見極められずに。

「社会」についてこれから研究しなければならぬことは多い。しかし「幼児」についての研究から更に一步進んで、「それぞれに違ったそれぞれの幼児ひとりひとり」が、充分に力を発揮できるようにまで内容方法を研究していかなければならないと思う。

× × ×

五才児

村 田 修 子

「社会」は他の五つの領域のどれにも密接な関係があるので、これを中心にしてとすると、その広範囲なものの中からどの部面を、どのように取り上げたらよいのか、ということが案外つかみにくい。社会生活をするのに必要な、基本的な生活習慣といったような、一つ一つ分けられたはつきりとした具体的な内容もあるし、集団の中で協力したり自分を主張して社会生活を営んでいく為に必要なの「言語」に含まれる事柄もやはり「社会」につながっている。このように考えていけば、絵をかくことも歌をうたうことも、すべてがつながりをもっているわけで、そのためにかえってつかみどころのないむずかしさを感じる。

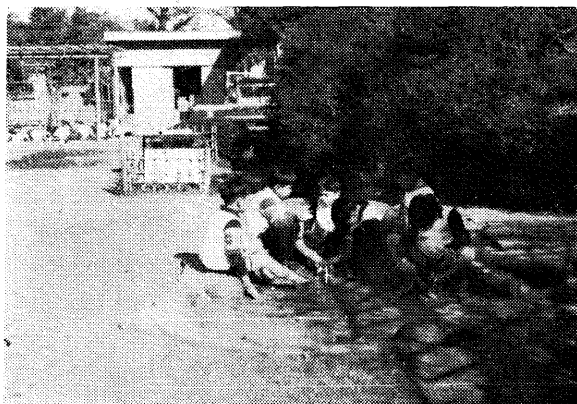
そこで、私の分担は五才児であるから、その

内容の一部面である五才児のもつ社会性というようなことを、この春卒業した人たちの普段の生活の中にみられたいろいろな「まとまった活動」をとおしてあげていきたいと思う。

その活動も、その組の持っているふん開気によって毎年ちがう。そしてそのふん開気は環境の中の人的環境、つまり教師に加えて幼児自身の構成メンバーによって、自然に独特のカラーがつくられていく。幼稚園では安定感をもって生活し、その中で自分を十分に出させることを一つのねらいとするために、組をかえたりすることは余りしない。そのこと自体はよい点が多いが、また一面からみるとこわいと思うこともある。だから、いつもその組の集団活動の傾向や状態について評価をしてみるが、この「ふん開気」というものがたいへんに影響があることを感じる。これは当然のことであるが、この三月卒業した人たちについてもこれを強く感じた。

まず組の傾向をあげてみると、十八名の女児が、いわゆる女の子らしく、口数が少なくておとなしいので、何となくものたりない感じであったし、男児十八名にしたところで、「何かすすんでやる人」というようなも

ひと遊びすんで池の中で相談



ちかけをした場合にいつも積極的に出る人は二人ぐらいで、あとは首をかしげて「できるかな」というような態度をする。いろいろに励ましを与えたりしてやるとやっとやり出す。という状態で、全員をまとめて扱うのはやりやすいが、何となく、どうにかなくてはならない、という気の弱さを感じる人が多かった。子どもの側の傾向はこのようであった

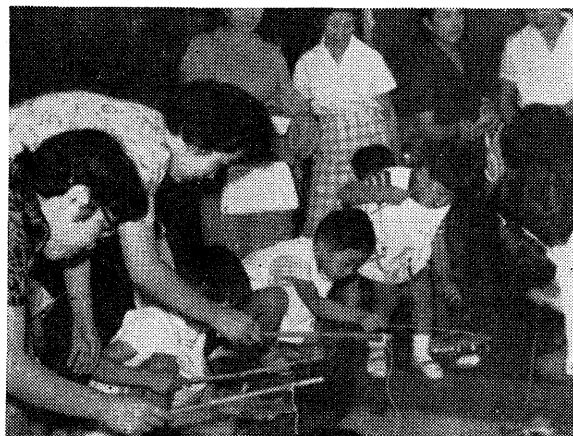
ためにひどいけんか、というものは余りみられず、自分たちで遊ぶということがたいへんよくできた。その上「遊びつつその中でいろいろの経験をさせるようにする」というやり方を主にしてきたことも影響して、私のはいる余地がないように遊びが展開されていた。そして、その遊び方も、たいてい七、八人のグループで、子どもらしい夢の中に、現代っ子らしい現実的なものを織りまぜて、「よくまあこのように遊べるものだ」と感心してしまうくらいであった。いろいろの経験をしている私ですら、よいことだと分っていないが「これはこうして続けさせておいてよいものだろうか」と信念がぐらつくような手もちぶさたを長時間味わうことが多かった。

こういうふん開気ができたのは、ほかにも原因があると思う。その一つに、M君の影響力が多分にあったように感じる。

M君は四人兄弟の三番目で、家では上と下から圧力がくるが、自分がそれをきけたり、だきようするために争うことなく過している。園では一応何でもするが、一人ですることには一応首をかしげるほうである。が生れ月が早いために生活態度も落ち着いているし、



お母さまをつりほりへ御招待



明るくおだやかなので人に好かれるタイプである。見ていると、人の言ったことを余り聞き入れてやってしまうので、はがゆい感じもするが、何かあったときにはさけたり、うまくまとめてしまう。その為にM君がはいると遊びがおもしろくしかも長く続く。それがだんだんほかの人にも影響して、M君がぬけても、その遊びはくずれることなく続けられる

ようにまでなった。また途中で遊びがこわれたとしても、そのメンバーのまま、またすぐ違う遊びにかわっていく相談などもうまくやられた。

そのまとまった遊びとしては、比較的規模の大きい「ままごと」や「のりものごっこ」のほかに、組の三分の二ぐらいの人数が参加して「少年たんでい団ごっこ」や、みんな犬

になってはいまわったり、走りまわったりする「わんわんごっこ」がやられた。

そのほか一年中「おすもうごっこ」「リレーごっこ」紅白に分れた「ボールとり」（みんなはこれをラグビーとよぶ）「はじめの一步」という鬼あそびがやられていた。

五才児ともなると、相当いろいろの制約のある遊びや組織だった遊びを受け入れることができるようになっていく。だから教師のもちかけかた、というものが大切になってくる。例としてリレーごっこの経験をあげよう。

今までも時期になると、関心のある何人かによってやられていたリレーを、秋の運動会のとき、全員が参加するように種目に加えてみた。距離は、小学生が二名で一周するところを三名でまわるようにした。今まで多くは折り返しリレーをしていたために、最初はバトンをもらって反対に走り出す人も三名ほどいたが、すぐなれて運動会ときは、走る人はもちろん、応援する小さい人たちもむちゅうになった。それは何だか大きい人たちの仲間入りができた感じでもとうれしかったとみえて、それ以来ひきつづきあきることなくやられ、冬の寒い日でも外で行なわれていた。

これは、組単位ではなく、四才児もまざり、男女の区別なく二、三十人も集まって、いつも自分たちだけで始められた。この場合は多く折り返しリレーであるが、みていると競争しようとする余り、出発線が一人、ことに前にはみ出していつて、ついには折り返し点のすぐ前になってしまつては解散しつづやられていた。私たちは「際限なく繰り返し繰り返し走っているから、段々に距離が短かくなつてちやうどいいこと」と話しあつていたほどあきずにやられていた。これなども、六組あれば、とかく組別の活動の多い中で、みんなをむすびつけるよい機会であつたと思う。

とりたててむずかしいことをする必要は少しもないけれども「この人たちにならできる」と見極めのついたことならば、やつてみると案外いろいろの収穫があるものな、という経験することができた。もちろん、この見極めるための物指しが大切な点であることを忘れてはならないが……

また、前にあげたどの遊びをみても何らかの形で一般社会の動きが反映されている。去年中心にとりあげて書いた「おすもうごっこ」にしても、皆のなりたい力上の名前が、その時

期々々の有望力士の名であることなど、それにつながるおもしろいことであると思つた。そのもう一つの例として、これは三才児たつたときのことであるが、その頃はデモということが新聞やテレビでよく報道された。「○はほしい」ということがよくきかれた。案外リスマカルなひきを持つこのことばは、すぐ子どもたちの心をとらえたらしく、初めはおとなのするそのまをまねていたが、ある日、そういうふん開気になつていとき園長先生がへやの中へ顔をみせた。とたんに、にこつと一人が笑つたと思うと、「えんちようはほしい」とやり出した。それにあわせてみんなが声をそろえてどなり出した。その時は少ししてから何とかおさまつたが、そののち半年以上も、園長先生の顔をみるたびに、ところかまわず「えんちようはほしい」が愉快そうに始められて、私をあわてさせた。

卒業の思い出にふけていると「いつのまにか、あれもいわなくなつたな」と思つたとき、見ていないようである、世の中の動きに敏感な幼児の時期というものをしみじみと感じた。だから五才児ともなれば、一般事象に

ついでの話しあいや、子どもの中から出てくる科学的な話しについても、適当な話し相手になれる先生でなくてはならないと思つた。

自分たちでじょうずに遊んだ反面、まとまつた活動も扱いやすい組であつたので、いつの年よりも全員でする集団遊びをよくやつた。これがまた楽しそうに、みんなが気分を盛りあげてやつたことはこの組の特徴であつたと思う。恥ずかしがりが多かつたことは、常に接しているおとなの側にもそれがあつたように思つたので、遠足やごっこ遊びのときなど、折をみては親子共に遊ぶ機会を作るようにした。保育が最後という日、親の希望によつて参観のときをもつたが、あいにく寒い日であつたので、子ども対親、のゲームをいろいろやつた。走ることは、もう余り差がないので、両方ともおかしきほど真剣にやつた。人数の関係で半分ずつするときには、予想を裏切つて、子どもは子どもの側に声援をおくつていたことも、成長を感じさせておもしろかつた。

ふりかえつてみると、初めから終りまでよく遊んだ組であつた、という一言につきるほどだ。けれど後悔はしていない。



富 樫 純 子

五才児は一年乃至二年間、幼稚園生活を経験しているので、個人生活、社会生活の望ましい習慣や態度及び、簡単な社会的なきまりは、或る程度身につけて実行できるようになっている。が、一方においては、なれからくるゆるみや、何かに夢中になって忘れたり、知っていてもそのまま過そうとしたりすることもあるので、常に子どもたちの様子や、折を見ての指導が必要である。なお、だんだんにふやしてゆく習慣やきまりもあるので、教師は常に努力して望ましい方向に仕向けることが大切である。

具体的な実際の指導や、実態については、一つ一つあげることではできないので、その中の一端を思いつくままにいくつか示してみよう。

まず、年長組になっての始めは、子どもたちは大きい組になった自覚を持ち喜んでるので、それをのびし、小さい友だちと仲よく遊ぶことや、遊具を分けあったり、ゆずったりして使うこと、困っている時には、助けてあげることなどを指導した。新しい友だちにおもちゃをつくっておくったりもした。

次におとうばんについて考えてみよう。これは五才児の大切な指導の一つであるので、少しくわしくのべてみる。四才の後期よりおとうばんを実行していたが、この頃は準備期で、年長組になって本当におとうばんの活躍、意義が深められると思う。きまりを守る、責任を持つ、相手の立場になって物事を考える機会を持つ、協力心を養い、独立する心を持つなど、おとうばんを喜んでしているうちに、これらのことが自然に身につき、理解されるわけである。

おとうばんは男女一名ずつで、保育室に各個人のおとうばん表を出しておく、その目のおとうばんがわかるようにしておく。おとうばんはリボンで印をつける。おとうばんの仕事としては、教師の手伝いをして、おべん当のしたくをする。机をふいたり、おぼんやおべ

ん当をくばる。使ったやかんを勤務員室まで持っていく。かたづけのとき、中心になってかたづけをする。帰りのときはかたづけの見まわりをする。おべん当のとき「いただきます」帰りの「さようなら」のあいさつをみんなの前に出する。その他、花だんに水をやったり、小さい花びんの水かえ、飼育物の世話の手伝いなどをする。音楽リズムなどで並ぶときや、体操のとき、帰りのときは先頭にな

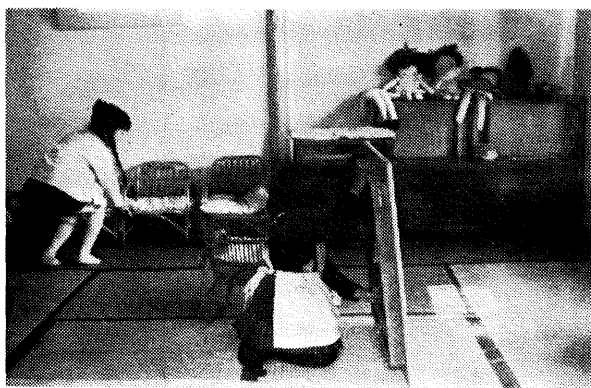


花に水をやるおとうばん

る。その他、時に応じてできることをする。

おとうばんの仕事も子どもたちと相談してふやしていったが、何と言っても、おとうばんはおべん当の仕たくの手伝がとても嬉しいらしく、水曜と土曜はおべん当がないため、おとうばんに当った子どもがつまらながるので、子どもたちの発案により水曜と木曜は同じおとうばんにし、土曜と月曜も二日することにした。おとうばんは楽しみに待っている様子で、おとうばんがすんだすぐの日から順番の名札を次は何日かと教え、二日間できる日に当ると、なおいきいきとして活動していた。協力の少ない男児Aは、おとうばんのとき、お友だちがなかなか協力してかたづけしてくれなくて困ったので、次からは自分も協力するような態度になったり、人の前に出て来ては恥ずかしくて話のできなかった男児Bは、みんなの前でおべん当のあいきつをした事がきっかけでだんだんに自信をもって恥ずかしがらずに発表できるようになった。もちろん個人差のある子どもたちなので、おとうばんのときでも各個人にあった教師の仕向けと、環境を整えるということが大切な要素になってくる。

子どものうちのかたづけ



遊んだあとかたづけ



婦りに共同の場所のかたづけをするというのも年長二組で実行した。主に遊戯室は他の組で、「子どものうち」のかたづけはこの組でしたが、毎日一生懸命にかたづけていた。砂場などのかたづけも、遊具だけでなく、だんだんまわりに出た砂まで、シャベルでよせ

砂場に入れたり、手洗い場の下の砂まできれいにし、もう後はおとながするからと言ったかたづけを打ち切るときも出るくらいであった。

友だち遊びグループ遊びが活発になってき



じゃんけん



ているので、グループの中で役割をきめ、遊びを発展させ、計画的に遊びを運ばせるように心がけた。ルールをきめ、役割を交代して、遊びや仕事をするような経験も持たせた。リーダーが固定してしまったり、ボス化したりしないように、また消極的で自己主張ができない子どもは、機会をのがさないで指導するようにした。自己中心性の強い子ども

も、遊具をなかなか他人にゆずれない子ども、乱暴に扱う子どもなども根気よく指導の機会をのがさないように気をつけた。何か遊びをはじめるときや、何か仕事をするとき自然に、お互いに肩をくんで頭をよせ合って、相談して話し合ってきめるようになった。問題の解決もできるだけ子どもたちの間でするように仕向けたが、教師はその解決を見守るよ

うに留意した。

幼稚園のいろいろの行事に参加したことも見逃せない経験であった。毎月のおたん生会、子どもの日、クリスマス、ひなまつりなどの集り、遠足、運動会など。

運動会の際にリレーをしたため、子どもたちはリレーがとても好きになり、自分たちだけでも遊び始め、組の大部分が参加して遊ぶという場面もたびたび見られた。リレーはルールを守って遊ばなくてはおもしろくないので違反すると批判するようになった。

子ども動物園に見学に行った後は、動物園ごっこに発展させ、協力し分担して、動物をつくったり、おみやげ物をつくったり、自分たちの乗って来たお猿の電車やモノレールを共同で相談してつくったりして、幼稚園中の友だちをよぶ機会をもった。動物園開園の日の子どもたちは本当に生き生きと積極的に活躍しとても喜びよい思い出になった。

三月のひなまつりは、年長二組で計画して集りを持った。当日はお母さま方もお呼びして、司会も子どもたちでし、協力して、楽隊や劇あそび、ペーパサートなどを発表し、楽し



い会を持つことができた。劇あそびの筋を相談してつくったり、それに必要な小道具も協力して準備し、プログラムをかくことも子どもたちみんなでした。共通の目的をもって力を合せるという経験が貴重であったと思う。

この一年間の子どもたちの経験したことをあげればきりがなが、こうしてふりかえつ

てみて、幼稚園の場合、いろいろな経験全部が社会の領域に関係があり、むすびつくといってもよいくらいである。毎日毎日ができるだけ、子どもたちの発達段階を考え、個人やそのクラスにあうような指導に努め、有意義に過すことが大切だと認識を深めた次第である。

幼児の教育 第六十二巻 第六号

六月号 © 定価六〇円

昭和三十八年五月二十五日 印刷

昭和三十八年六月一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご講読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

フ
レ
ー
ベ
ル
館
御
中

(おなまえ)

(おところ)

昭和 年 月 日

なつのおともだち

②①
(年長用) (年少用)

申
込
書

冊 冊

申し込みます。

(きりとりせん)

- 科学的で、実生活に即した内容の夏休み帳
- 現代っ子の感覚に、ぴったりです



① 年少用

なつのおともだち

今年のなつのおともだちは、幼児の身近な素材を利用して「つくってみましょう」「やってみましょう」と呼びかけています。

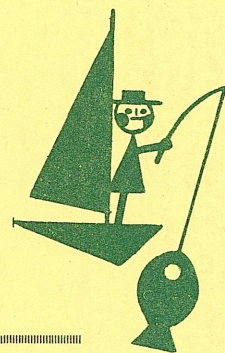
図鑑形式の観察頁。言葉遊びや数遊びのほか、形探しや磁石の働き等をテーマにしたワーク。色紙を使った美しい工作。また付録の生活表は、記録しやすいノートになり、夏の幼児の生活に関したお母様向けの記事も掲載されています。

①年少用(生活表つき)……定価60円

②年長用(生活表つき)……定価60円



② 年長用



お申し込みは最寄りの弊社代理店・出張所へ

発行

フレーベル館

申込書

フレールベル館

御中

昭和 年 月 日

ご住所
ご園名

〔あそびとちえ〕

冊 申し込みます。



定価 100円

ご存じですか
5才児を 目標にした
本です。

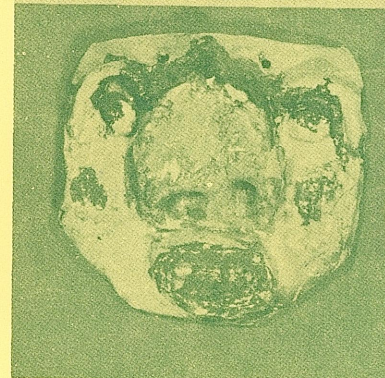
園のお休みも これで安心！

5才児のための

あそび と ちえ

5才児のための

あそびとちえ



ここから切ってお申し込みください。

現代っ子は、いろいろな意味で成長しています。
教えない数や文字をおぼえたり、紙工作や、
絵のほかにも、廃品や手近かなもので
どんどん面白いものを作りだしていきます。
しかし、こんな時こそ正しい経験のさせ方や
知恵ののぼし方が大切だと思います
「あそびとちえ」は、このような意味から
5才児のために作られたもので、
お休みには家庭でも楽しく使えるように
考えてあります。

内容：観察・製作・言葉・数・社会・お話・歌等

付録： お母さま向け別冊「ものしり手帳」つき

B5判50頁 定価1冊 100円

監修 小山田幾子・和田信蔵・田中次雄・中島修・栗岡隆史・山村きよ・山内昭・藤田復生・秋田美子・三木安正先生(イロハ)

お申し込みは、最寄りの代理店・出張所へ…… フレールベル館

保育学年報 一九六二年版

保育学会一九六二年の大会研究報告と、保育資料を収録してあります。保育界の動向と保育学研究のリストもまとめてあります。

日本保育学会編 定価六〇〇円

千一〇〇円 B5判一七六頁

幼稚園教育指導書

自然編指導の実践

自然指導のための手びき書!!

幼稚園教育指導書「自然編」の執筆者が指導実践のためにくわしく解説した保育者必携の書

大島文義他共著 定価 三七〇円

千七〇円 A5判二九八頁

子どものための交通安全指導書

幼児に交通安全教育を!!

子どもたちに正しく、楽しく交通道徳を教育できるように、交通安全指導の意義およびカリキュラムを、適切な音楽リズム、指導教材をまとめてあります。

斎藤敏夫他共著 定価一二〇円

千二〇円 A5判八〇頁

フレール館 発行

幼稚園教育要領に準拠した幼児のための楽しい曲集

みんなで たのしく 〈曲集〉

鑑賞教材・歌唱教材・リズム教材など全24曲を収載、系統的曲集 250円

幼稚園教育要領に準拠したレコードによる音楽リズム指導の実践

みんなで たのしく 〈指導書〉

同名のキング保育レコードより25曲を抜粋、多角な解説を試みた 250円

幼児のための

7つの オペレッタ

藤田妙子著

日常のリズム遊びから自然にオペレッタへ発展できる楽しい曲集 340円

キンダーブック

7月号予告

こんちゅう

別冊

キンダーブック

物語絵本

(季刊)

夏の号

うたのないきゅうかんちょう

文・藤田圭雄
絵・大橋正



別丁ベアレンツコーナーつき

B5判 20頁 50円

刷株式会社印刷



子どもたちの大好きなちょうちょ
やかぶとむしなど、その生態や飼い
方までくわしく絵に表わした自然観
察のためのこんちゅうの図鑑。

A4判 16頁 付録つき
60円

東京都千代田区神田小川町 3-1

フレーベル館

振替口座 東京 19640 番 電話 東京 (291) 7781~5